

## MIKAWA

東三河懇話会 会報誌

2018.7.20 vol.79

## NAVI

名工の技と道具  
広告美術の妙技 31

浜松駅近く、株式会社アンペンの仙田治興さんは手描き看板の専門技能をもつ広告美術工だ。同社は塗装業から始まり、先々代が近隣劇場の手書き映画看板を手掛けたことから広告美術を扱うこととなった。仙田さんは幼いころから職人の手伝いなどをしながら手描き看板の腕を磨いたという。

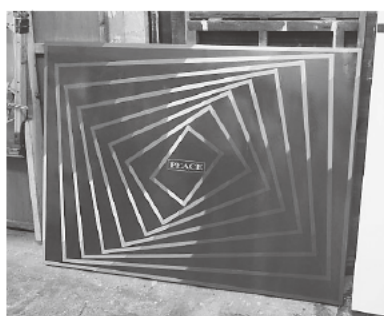
広告美術工は、レイアウト、描画、展示の全てを行うが、技能が発揮されるのはやはり手描き描画の仕事だ。道具も平筆や丸筆、ペンキなど一般的なもののばかりで、まさに腕がものをいう世界である。

取材時、表彰式等で舞台に飾られる吊り看板の手描き作業を見せてくれた。仙田さんは文字数と大きさのバランス以外、ほとんど下書きはせず、レイアウトを決めると筆を走らせる。数回なぞるだけで、文字の一部がゴシック体で浮かび上がり、文字が組みあがる。複雑な文字も狂いなく正確である。長年の経験による筆さばき、書体や文字のバランスなどを体で覚えているからこそできる技だ。

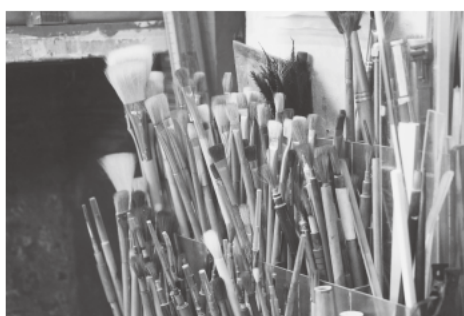
現在、手描きを指定する注文は数少ない。しかし、自らコンピュータでデザインした作品を手描きする作品をつくるなど新しい技術も取り込み、技能継承に積極的に努めている。仙田さんは平成29年度「現代の名工」に選ばれた。

株式会社アンペン

所在地…静岡県浜松市中区田町326-26  
TEL…053-452-0505



コンピュータによるデザインと  
手描きを合わせた仙田さんの作品



手描きに使うたくさんの筆



吊り看板を手描きする仙田さん



手描きに使用する平筆と丸筆



|                                         |   |
|-----------------------------------------|---|
| NAVIGATION .....                        | 1 |
| 平成30年度定時総会開催                            |   |
| 記念講演会 .....                             | 2 |
| 東京大学大学院 工学系研究科都市工学専攻 小泉秀樹氏              |   |
| 「少子高齢社会における東三河のまちづくりをPlacemakingから構想する」 |   |
| NEWS CENTER .....                       | 5 |
| 懇話会のニュース・地域のニュース                        |   |

## SALOON REPORT ..... 6

懇話会講演録

第401回 東三河産学官交流サロン ー平成30年3月20日開催ー

甲斐順也氏『～働き方改革第2章“生産性革命”へ～

HR Techの活用で実現する人材活用効率変革のシナリオ』

伊東利勝氏『宗教の政治経済学』

第402回 東三河産学官交流サロン ー平成30年4月17日開催ー

三輪多恵子氏「地域企業連携プロジェクトの取り組み～のんほいパーク盛り上げ隊！の活動を通して～」

平澤 興氏『東三河の経済を支える三河港』

第403回 東三河産学官交流サロン ー平成30年5月15日開催ー

大村 廉氏『シビックテックによる街のスマート化～豊橋市での活動について～』

穂積亮次氏『地方創生戦略の一断面～世代のリレーができるまち～』

第181回 東三河午さん交流会 ー平成30年4月6日開催ー

杉浦 篤氏『山里の豊かな資源』

第182回 東三河午さん交流会 ー平成30年6月1日開催ー

中村禎一郎氏「中東ってどんな場所？何が起きているの？」

## 会員関係者の動静、伝言板.....22

表紙写真：名工の技と道具31 仙田治興氏

〔文・写真〕 柘植芳之氏（愛知県立豊橋工業高等学校）

〔監修〕 石田正治氏（名古屋工業大学 非常勤講師）

### ～とよしんインターネット48～ インターネット支店

ご来店不要！

日本全国

どこからでも！



おたくも うちも

豊橋信用金庫

<http://www.toyo-shin.co.jp>

<http://www.arcriche.jp/>

優雅なひとときを  
過ごす空間がここに

**HOTEL ARC RICHE  
TOYOHASHI**

ホテルアークリッシュ豊橋  
〒440-0888 愛知県豊橋市駅前大通1-55  
TEL.0532-51-1111





## 東三河懇話会 平成三十年度定時総会 開催

当会は、六月十二日(火)午後三時より、ホテルアークリッツシュ豊橋五階「ザ・グレイス」において、平成三十年度定時総会を開催、会員関係者約百十名が出席した。

開会にあたり、吉川一弘会長欠席のため、神野吾郎副会長が以下のとおり挨拶した。

『本日は、米朝首脳会談が開催される歴史的な日となりました。

両国による今後の展開は読めませんが、短期間で歴史を塗り替えるようなトップの決断には驚いています。今後の北朝鮮は、中国、ロシア、アメリカの結節点となり、地政学的に重要な位置を占めると同時に、国民にはこれまで



とは大きく異なる新しい生活がもたらされることになるかもしれません。

このように、世の中が驚くべき変化を遂げる中、ビジネスや地域においても、変革の有無が先々の道筋に違いを生じさせます。総人口が減少過程に入った東三河地域においても、地域資源を最大限に活用しながら、なおかつ不足する部分を埋めていく必要があります。本日は産学官の皆様にご出席いただいておりますが、地域が生き残るためには、界を超えたつながりにより地域に新しい価値を生み出し、同時に人を育てることが極めて重要と考えます。

懇話会は今年の十月に設立五十周年の節目を迎えますが、懇話会としての活動は、地域の発展に活かされてきました。節目の総括、未来に向けての戦略的な組み立てを行い、皆さんで議論することで懇話会一〇〇年に向けた新たな一歩を踏み出したいと思っています。

総会後は、東京大学大学院の小泉秀樹先生に講演をお願いしています。小泉先生は、震災後の復興まちづくり、高齢化する住宅地の活性化など、コミュニティを通じた地域づくりを学術的に研究されるとともに全国各地で実践されており、現在、豊橋の再開発に伴うまちづくりにも

ご指導いただいています。

最後になりますが、会員の皆様におかれましては、引き続き当会の運営に格段のご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

その後、平成二十九年度事業報告並びに収支決算報告、平成三十年度事業計画(案)並びに収支予算(案)、役員改選、設立五十周年記念事業の件が審議され、それぞれ承認された。

総会後の記念講演会では、東京大学大学院教授の小泉秀樹氏による「少子高齢社会における東三河のまちづくりをPlacemakingから構想する」と題した講演を行った。

記念講演会後は、四階「ザ・テラスルーム」にて交流懇親パーティが行われた。当会副会長で中部ガス(株)取締役相談役の中村捷二氏の開会挨拶に続き、愛知県議会議員の浅井よしとか氏、湖西市長の影山剛士氏よりお言葉をいただき、愛知大学の川井伸一学長が乾杯の音頭をとられた。和やかな雰囲気の中、会員同士の交流が図られ、当会副会長で本多プラス(株)会長の本多克弘氏の中締めの挨拶で閉会となった。

# 記念講演会

## 「少子高齢社会における 東三河のまちづくりを Placemakingから構想する」

東京大学大学院 工学系研究科都市工学専攻  
教授 小泉秀樹氏

### ●少子高齢化による社会的ニーズの変化

日本は、人口減少とともに世帯数も減少し始めている。人口が減少しても、世帯数が増えている地域はまだ元気なことが多い。世帯数が増えていけば、自治会を運営することができ、空き家や空き地もそれほど問題にはならない。ところが、世帯数が減り始めると、町会や自治会の運営が難しくなり、空き家などの問題がより顕著になる。

人口は2000年頃から、世帯数はここ数年で減り始めており、平成の終わりは変曲点の世代である。社会の構造が大きく変わる時代の最中にいるという認識を持っている。社会的ニーズも変わるため、新陳代謝していく必要があるが、古い住宅を取り壊すことなく新しい住宅を造ることが、空き家が増える理由の一つになっている。

われわれが行った首都圏の調査では、世帯数が増えているところもあるが、減るところが増えている状況であった。全体で見ると好調なエリアの中でも、ミクロに見てみると減ってしまうところが散在しているということがある。

東京はコンパクトシティというが、通勤距離帯別に見ると大きな変化はない。新しい住宅の供給や世帯数の増減などで見ると確かに都心に集まっ



小泉秀樹氏

るが、既に住んでいる方が圧倒的に多い。まちづくりをする中で、都心に住んでもらうことは必要だが、郊外に住んでいる人がいなくなるわけではない。都心と郊外の両方を見ながら、地域政策や地域振興を考えなければならぬことが見えてくる。

われわれが直面している大きな課題は、高齢化である。今、少子化対策をして、仮にこの5年位で劇的に出生率が増えたとしても、その効果が表れるのはその子どもたちが20〜30代になってからである。1990年代に少子化対策を行っていたら今頃効果が表れていたと思うが、20〜30年後の社会に向けて、今からでも少子化対策をいろいろなアプローチで行っていく必要があるだろう。

20年経つと、韓国や中国、シンガポールでも高齢化の問題を抱え始めるだろう。私が学生の頃は、当時の先生たちはスウェーデンなどに高齢化問題を学びにいった。北欧では日本より先に高齢化が進んでいたが、90年代の半ば頃にクロスし、いまや日本は高齢化で世界のトップランナーである。この20年程で、日本は世界的にも経験のないような高齢化の局面に入ってきた。その観点からも、われわれが直面する社会の現状が見て取れるだろう。

地域別で高齢化の現状を見てみると、東北などで高齢化が先行しているが、最後は大都市圏の方がより深刻になる。少子化や高齢化で社会的ニーズが大きく変わり、例えば、全国レベルで見ると、認知症の人数が20〜30年の間に倍増する。そして65歳以上の世帯が増加。さらに単独世帯や夫婦のみの世帯の割合が非常に高く、特に単独世帯が急増することにも注目しなければならない。愛知県は若い人たちが流入してきているため、高齢化率はまだそれほど高くはないが、増加する高齢者数では、三大都市圏が圧倒的に多い。そういう意味では、愛知県も増加の数では非常に多いエリアで、少子化対策はもちろん高齢化への備えは必須である。

現在進められている地域包括ケアの狙いは、住み慣れた地域で最期まで暮らせることである。介護の

希望に関するアンケートでは、「自宅で家族の介護と外部の介護サービスを組み合わせた介護を受けたい」「家族に依存せずに生活できるような介護サービスがあれば自宅で介護を受けたい」といった意見が多く、「どこで」で見ると75%が自宅を希望している。本人の希望だけでなく、家族の希望もほぼ同じような結果であった。住み慣れた場所ですら最期まで暮らしたい、暮らさせてあげたいと考える方が圧倒的に多いことが分かる。

### ●公共施設マネジメントの取り組み

高齢化は、悪いことばかりなのだろうか。子ども数が減り高齢者が増えるということは、地域で暮らす人の割合が増えるということであり、まちづくりの観点からいうと、地域での支え合いがしやすくなる面もある。職と住の分離が近代都市計画の発想であったため、女性も外に出て働く社会になると、住み場所である地域には昼間は子どもや高齢者しかいなくなってしまう。高齢者の方たちに地域で活躍していただくことによって、地域での豊かな暮らしを実現すチャンスがあるということがある。

行政の立場では、公共施設のマネジメントや維持管理が重要なテーマとなっている。ある首都圏の自治体の建設年次毎の建設量を見ると、1970年から1980年頃に一気に公共施設が造られている。そのため、これから大規模改修などが一度に増え、一旦減るがまた増える時期がやってくる。平均して、現在の2.2倍程メンテナンス費用が必要となる。自治体が小学校や公民館、児童館などの統廃合や除却を積極的に行っているのは、このまま放置すると財政負担になる可能性があるためだろう。全国調査では、財政力が高い地方公共団体で積極的に取り組まれていることが分かっており、市民の集会施設や子育て支援、福祉生涯学習施設など、生活に身近な施設の統廃合やマネジメント



が大きなテーマである。

その他にも、ワークライフバランスや単親世帯の増加、子育て環境の劣化などの問題がある。また、OECDの調査によると、会社と家族以外に付き合いがない方の割合は、OECD加盟国の中で日本はメキシコと並んで突出して高い。会社がなくなると居場所がなくなる男性や、家庭が不和になると居場所が良いが、何かあると途端に不安定になる可能性がある。日本は、そのような危うさがある社会になっているという問題意識も持たなければならぬ。

## ●再開発からエリアマネジメントへ

まちづくりの代表的な手段として、市街地再開発事業の制度がある。これは市街地の環境を改善し、高度利用といてその地域の有効な形で利用を促進するものである。かつての再開発は、高層化を中心に進められてきたが、2000年代以降になると「身の丈の再開発」という考え方が登場。無理して高層化するのではなく、地域に見合った無理のない範囲で事業を成立させ、マネジメントに移行するタイプが増えてきた。もちろんある程度の高層化は必要だが、地域の文脈にあった利用をしていくことが高度利用である。

これからの時代は、新しいエリアの価値を創造できるかどうかのポイントになる。金沢の再開発プロジェクトは、参考になる事例である。東京で行われるような大規模な再開発ではなく、スケールを抑えながら、小さなプロジェクトを連鎖させエリアの再生を戦略的にやっている。

さらに発展した考え方が、エリアマネジメントである。国道交通省で定義するエリアマネジメントとは、「地域における良好な環境や地域の価値を維持・向上させるための、住民・事業主・地権者等による主体的な取組」である。もちろん国や行政は協力するが、基本的にはその地域で活動する事業主や地権者、住民が自分たちのエリアの価値を高めていくこ

とを、エリアマネジメントと呼んでいる。互酬性の側面では、いろいろな社会的な喚起できるというメリットがあり、公共的な側面からは、対象エリアのみならず周辺への波及効果も期待できるということがあり、エリア内については価値を向上させるという経済的なメリットもある。

長野県飯田市の中心市街地再生は、エリアマネジメント活動の初期事例の一つである。中心市街地において、いろいろなプロジェクトを連鎖させている。まちづくり会社が、シンクタンク的な機能やデベロッパー的な調整機能を持ち、中心となって推進している。そしてさまざまな団体が出資して、地域の人が協力してまちづくりを進める体制をとっている。再開発、住宅供給、高齢者向けの住宅供給などのハード対策を行い、さらにイベントや空き家対策などのソフト対策も行っている。

戦後の高度成長期頃までは、多くの人の住む場所と働く場所は分かれていなかった。サラリーマンの方も一部いたが、農家の方や商店街などの小規模事業主の方も、住んでいる場所と働いている場所が同じかすぐ近くであった。ところが、都市計画や都市政策によってその二つが分かれてしまったことが、まちのにぎわいを失う一つの大きなきっかけになってしまったという反省がある。中心市街地は一つの共同体であり、その都市全体に対して公共的な意味を持つ場所であり、市民の財産だということである。

また、公共施設の整備に合わせて、エリアマネジメントの視点が活用されている。代表的な事例として、姫路駅前広場周辺の整備事業がある。バスやタクシーの乗降スペースは従前に比べ小さくし、大胆に広場の整備をした。多くの駅前広場では、交通施設になってしまっていて、市民の交流スペースはほとんどない。交通ニーズが交錯する以前の駅前は、のんびりしていて、いろいろな人が交錯するような場所であった。戦後の高度成長期以降に減ってしまった、市民が憩える機能を取り戻そうというプロジェクトである。姫路城に繋がる道路のうち環状道路に

至る区間は、歩行者と公共交通しか入ることのできない、日本で初めてのトランジットモールを整備した画期的な例である。

エリアマネジメントの取り組みは、東京でも行われている。東京の神田のWATERRASでは、芝生広場を造り、いろいろなマネジメント活動をしている。御茶ノ水や神田エリアには大学がたくさんあるため、学生が地域活動に参加するといった取り組みや、アート活動なども行われている。

地方都市の例として、長岡市を紹介したい。20年前前は中心部が衰退していたが、まちなか型の公共サービスを提供し、文化交流、教育、住む機能、医療、商業、飲食、働く機能などを合わせることで、まちなかを再生させようという戦略である。いろいろなプロジェクトを連鎖させ、一つ一つ丁寧に戦略性を持って作り上げることで、地域の再生を図っている。長岡技術科学大学も協力していて、大学、市民、NPO、行政、企業が連携の場として、まちなかキャンパス長岡を運営している。長岡の中心市街地に関連する企業だけでなく、在京企業も会員となって協力することによって、さまざまな活動の担い手や原資を作り出している。

浜松市でも、浜松まちなかにぎわい協議会が設立された。いろいろな企業が出資し、エリアの価値を創造するエリアマネジメントの団体で、さまざまな街中の活動をしている。

## ●豊橋まちなかの活性化について

豊橋駅前では、複数のプロジェクトが実際に動いている。それらを活用してエリアの価値を高めていくためには、運営する主体が大事なポイントになる。豊橋駅前の再開発に合わせて、エリアマネジメントの組織を立ち上げるために、私もお手伝いしている。駅前大通南側の水上ビルやコラフロント、南口広場などを中心にしながら再開発のエリアを合わせてマネジメントしていき、さら

に北側のエリアや公園などを含めてエリアのマネジメントをする体制へと発展させていく構想である。今は準備段階で、広場が完成するタイミングで本格運営をして、そこから中心市街地全体に広げていくことができるかと考えている。

本日のタイトルにあるPlacemakingとは、日本語でいうと場づくりである。場とは空間的な意味で、例えば、今日のこのホールも場である。しかしホールが場としての意味や価値を持つのは、そこで講演や議論などいろいろなことが行われるからである。今あるものや、これから創るものについても、そこでどういう活動をするのかによって場の価値が決まってくる。その価値を創っていくことを、Placemakingと呼んでいる。中心市街地のような人工物が多い所もあるが、それだけではなく、公園や緑地、森林などの価値をどのように創出するのも含めて、Placemakingというのである。

### ●小さな場所づくりからのまちづくり

小布施町は、人口1万2千人の小さな町である。その中で、町並み修景事業に取り組んでいる。民間で行われている町並み修景事業が、町の観光政策と結び付き、非常に成功した事例となっている。まちづくりに携わる人で、小布施町を知らない人はいないだろう。北信に旅行する方が必ず立ち寄るような、魅力的な町になっている。

町並み修景事業で「景観」に対する町民意識が向上し、「花」によるまちづくりも展開されている。例えば、きれいに整備された住宅の庭を開放する「オーブンガーデン」では、1万2千人しか住んでいない町で、農村部を含めて130軒の家が庭を開放している。歩いているだけでも楽しくなるような町である。小布施町から始まったオーブンガーデンは、今では全国に広がっている。

また、地場企業と農産物を組み合わせたスイーツづくりなど、付加価値の高いものを作り上げようと取り組んでいる。その他には、健康づくり事業や国

道のストリートデザインが大きなテーマである。昔の街道沿いの町は、人が佇むことができる生活の場所であった。道だけが独立してあるのではなく、周りの建物で行われる商いと生活と道が一体となって空間ができていた。自動車優先とすることで壊れてしまった空間を、取り戻そうという取り組みである。

### ●東三河とつてのトータルなまちづくり構想

東三河は、山の方にいけば豊かな自然があり、ジオパーク構想や、ウォーターフロントもいろいろなレジャー施設がある。豊橋は中心部の再開発を進めているが、さまざまな資源が東三河にはあるため、エリアとエリアをつないでいくような、トータルなまちづくりを構想できる。それはこれからの時代にとっても大切である。地域の魅力や価値は、誰かが見つけて育てていく必要がある。一つの試みだけではなかなかうまくいかないため、連携し協力していくということである。

飯田市や長岡市は、中心部に限って連携的な活動をしている。浜松市でも、違う事業者が協力することと、地域の再生を図っている。連携しながら違う場所の魅力を引き出すということは、いろいろな主体が協力しながら行うということである。それがうまくできると、ポテンシャルのある東三河はより発展していくだろう。

豊橋駅前の再開発は、「元気化ガーデン」というコンセプトで取り組んでいる。まちなかの元気のシンボルとしての広場と、それと連動した活動を育むような施設が計画されている。食、健康、学びといったコンセプトで、食であれば東三河の豊かな農産物をまちなかで体験できるような場所になる。つまり、地域の連携のシンボルにしようという考えである。こういった取り組みを、いろいろな所に展開できるというのではないか。例えば、マリーナで海産物だけでなく農産物も楽しめると、海でのレジャーと農業がつながる。その逆もあるかもしれない。いろいろな形で連携していくことで、さまざまな可能性が

広がっていく。いろいろな主体との連携が想定されるが、このようなスキームが各地で多面的に起きてくると、面白いまちづくりにつながっていくだろう。

そのためには、地域に存在するストックの資源化と活用が大事である。丁寧に価値のあるものをつくり、長期的な視点でエリアの価値を育てていくこと、そして単独の施設のマネジメントでは力を結集することができないため、エリアをマネジメントする主体が必要だと考えている。多様な主体による共創的なアプローチで、面白いことが生まれる可能性がある。

まちづくりは、物語づくりである。ストーリーを物語として描いて実践し、一つ一つの場所がうまくいくと、今度はそれをつなげるような大きな物語をどう描けるのかという発想に展開できる。まさに飯田市や長岡市が行ってきたストーリーである。最初は一つのプロジェクトを成功させて、その成功をきっかけに次のプロジェクトを行う。二つ、三つになると、それをつなげるようなプロジェクトを考えながら、エリアとしての価値を高めていくというアプローチである。今日はたくさんの方にお集まりいただいたが、これほど多様な方が集まる場があるということは、とても価値のあることである。このような場をきっかけにして、そういった取り組みができれば素晴らしいことである。

最後に、私が関わっているプロジェクトで、渋谷未来デザインという組織を立ち上げた。浜松のまちなかにぎわい協議会と似た組織で、行政と民間が半額ずつ出資している。多数の企業が力を合わせて行政と一緒に投資し、エリアの価値を共創するピークルになるような組織を立ち上げることができる。東三河でも、これからそういった共創型のまちづくりに取り組んでいただけたらと、さらに素晴らしい地域になるのではないだろうか。





## 平成三十年度理事会開催

### ■東三河懇話会

平成三十年度理事会が、五月二十一日(月)午前十一時よりホテルアークリッシュ豊橋にて開催され、平成二十九年事業報告並びに収支決算報告、平成三十年事業計画(案)並びに収支予算(案)、役員改選、設立五十周年記念事業に関する件が審議された。

## 平成三十年度

### 三河港関連事業計画等説明会及び

### 東三河地区幹線道路整備計画に関する説明会開催

### ■東三河懇話会・三河港振興会

六月十三日(水)午後一時半より、三河港関連事業計画等説明会がライフポートとよはし中ホールにて開催された。参加者は約九十名。

平成三十年度三河港関連事業計画の概要について、国土交通省中部地方整備局三河港湾事務所長の

平澤興氏、愛知県三河港務所長の浅井仁司氏、愛知県三河港工事事務所長の狩谷伸一氏が説明をした。

また、東三河地区幹線道路整備計画に関する説明会は、七月九日(月)午後二時よりライフポートとよはし中ホールにて開催され、約百三十名が参加した。

国土交通省中部地方整備局名四国道事務所長の牛居恒太氏、同局浜松河川国道事務所副所長の平井親一氏、愛知県東三河建設事務所長の川上晃一郎氏、同県新城建設事務所長の丹羽康博氏が、それぞれ東三河地区幹線道路整備計画について説明した。

## 第四〇三回・第四〇四回・第四〇五回

### 東三河産学官交流サロン開催

### 第一八二回・第一八三回

### 東三河午さん交流会開催

### ■東三河懇話会

当会と(公社)東三河地域研究センターが主催する第四〇三回東三河産学官交流サロンが、五月十五日(火)午後六時よりホテルアークリッシュ豊橋にて開催された。講師に豊橋技術科学大学情報・知能工学系講師の大村廉氏、新城市長の穂積亮次氏をお招きした。(講演内容は本号にて掲載)

第四〇四回は、六月二十七日(水)午後六時よりホテルアークリッシュ豊橋にて開催。愛知大学文学部准教授の関義正氏が「動物の行動から考えるヒトの音声活用の特異性」、参議院議員の太田房江氏が「女性活用、人口問題等について」をテーマに講演された。

第四〇五回は、七月十八日(水)午後六時よりホテルアークリッシュ豊橋にて開催。愛知工科大学工学

部情報メディア学科教授の田川和義氏が「VRとIoTの医療応用...いつでもどこでも訓練が可能なシミュレータの開発」、さわらびグループCEO/DEOの山本左近氏が「超年齢社会をデザインする」をテーマに講演された。(以上の講演内容は次号掲載予定)

一方、第一八二回となる東三河午さん交流会は、六月一日(金)十一時半よりホテルアークリッシュ豊橋にて開催。講師に中日新聞豊橋総局総局次長の中村禎一郎氏をお招きした。(講演内容は本号にて掲載)

第一八三回は、七月四日(水)十一時半よりホテル竹島にて開催。フリーライターの大宮冬洋氏、(株)サンヨネ営業本部長の三浦和雄氏をお招きし、「蒲郡在住ライターが聞く!サンヨネの秘密」をテーマに対談を行った。(以上の講演内容は次号掲載予定)

豊橋名産  
**サ ちくわ**

TEL(0532)52-7139 FAX(0532)56-2789

Homepage <http://yamasa.chikuwa.co.jp/>



## 第四〇一回東三河産学官交流サロン

## 働き方改革第2章「生産性革命」へ

「HRTech」の活用で実現する  
人材活用効率変革のシナリオ

（株）パソニール総合研究所

タレントマネジメント事業本部  
タレントマネジメントコンサルティング部

ディレクター 甲斐順也氏

## ●「HRTech」はなぜ注目されているのか

HRTechとは「Human Resource（人事）」+「Technology（技術）」で、人事業務領域に於ける最先端の情報テクノロジーを活かしたサービスの総称である。

なぜ「いま」、HRTechが注目されているのか。「いま」を複数の視点から見つめてみると、技術の進化という点では、現在、自立的な最適化が可能な時代

がやってきており、第4次革命の時を迎えている。そして、社会の変化である。狩猟社会から始まり、農耕社会、工業社会、情報社会の次は、高度な技術が生活の隅々にまで渡り、より快適で質の高い生活がおくれる超スマート社会へと突入していく。



甲斐順也氏

もう一つの観点は、労働力の問題である。このままの経済成長のトレンドでは、2025年時点で583万人の労働力が不足するとの推計があり、労働力が足りなくなれば日本経済は衰退していく。では、労働力不足をどう補っていくのか。例えば、シニアの方にはより長く活躍していただく。女性や障がい者の方には社会に出て活躍していただく。労働力として外国人の方に来ていただく。そうして生産性を向上することによって、114万人程の労働力が生まれる。これらを全てうまくやらなければ、583万人をカバーすることはできない。

そして、働きがいの変化がある。かつては、多くの方が仕事中心で、ある意味単一的な価値観の中で働いていた時代があったが、現在は、仕事より優先するものがたくさんある世の中へと変化しており、多様な意識の変化に对应していかなければならない。また、人事機能も変化しており、現在の業績を維持するために必要なオペレーションの人事、経営人事、戦略的な人事が求められる。

働き方改革では、大企業を中心に残業時間削減などの意識が定着しつつあり一定の成果が出たように思われるが、仮に時間に比例するアウトプットの出し方をしていたとすると、時間が短くなった分アウトプットが減ってしまう。そのままいくと経済が衰退してしまうため、同じアウトプットをいかに短い時間で出していくのかという着目点が必要であり、人事の観点からいうと、テクノロジーを活用し、より一層生産性を上げることが求められている。

## ●「HRTech」活用による生産性向上とは？

HRTech活用による生産性向上とは、人材活用効率を向上させることである。単に人事にシステムを導入して業務を効率化するだけではなく、データを活用して今までなかったような人の見方や活用の仕方をするにより、タレント（個の才能・能力）に着目したマネジメントを推進していくのである。人材の価値を拡大して人事を効率化することで、人事業務のコストを下げたり人件費を下げたりする。これが成立することによって、全体として人材活用効率を最大化することができる。

ところが、それを阻害する要因が大きく二つある。一つ目は、属人的な業務で、一部の人の経験と勘に依存したいわゆる日本型の人事マネジメントである。そこに対してデータや客観的な指標に基づいて判断される状況を作っていく必要がある。二つ目は、効率性、即戦力などを近視眼的に追及してきた後遺症である。20年程前に成果主義という言葉が日本にやってきて多くの大企業で導入されたが、ある意味そこに誤解があったのではないだろうか。個々のキャリア形成よりも短期に業績をあげることを重視し、継続的な業績向上のために時間をかけて育成するという考え方が置き去りになっていった側面がある。今後、中長期で人を育成する仕組みや、顕在化していないようなポテンシャルを見極める新たな視点を取り入れて、人事部門そのもののあり方を大きく変える必要がある。

人事は定型化しづらい領域で、人手でいろいろなことを行ってきた経緯があり、デジタル化が進んでいない。これまでは、管理業務や処理業務などの手数が必要な所に人事の方が多くの時間を割いていたが、HRTechの活用により人事業務そのものがある程度機械に任せられることで、浮いた時間を戦略・企画業務に回すことができるようになる。その辺の事はすぐにはできないため、データの裏付けによって一層高度化し追及していく領域だと考えられるが、これらによって人材活用効率を上げる仕組みができるのである。

では、どのようなHRTechテクノロジーサービスがあるのだろうか。実は、世の中には既に無数のHRTechテクノロジーサービスが存在している。サービスが多様化す



る背景には二つの着目点がある。一つは、データである。最近では、テキストデータや数値データだけでなく、音声、画像、動画、生体データなど扱えるデータが多様化している。そしてもう一つは、そのデータをどう料理するかである。分析手法はものすごいスピードで進化し、分析するための便利なツールも普及している。新たにテクノロジー活用で踏み出す人が増えている状況もあり、どんどん新しいテクノロジーサービスが誕生している。人事分野に関しては、いろいろな方が興味を持って参入してきており、人事分野をデジタル化して進化するチャンスが来ていると言えるだろう。

### ●普及期に入っているHR Tech

HR Tech 活用による生産性向上とは、人材活用普及期に入ろうとしている3つのHR Tech についてご紹介する。一つ目は、タレントマネジメントシステムによる戦略人事の基盤構築である。タレントマネジメントとは、一人一人の社員をタレントと見立ててマネジメントをしていくという考え方である。日本では、約3割の企業でここに着目した人事が行われている。

従来の人事マネジメントとの一番の違いは、人的資本を最大化する統合的・総合的な営みであるということである。採用も育成も一貫通貫で戦略的な人事機能を構築するという考え方で、情報も一元管理して積極的に活用していく。

3つの人事機能の内、経営人事、オペレーション人事に関しては、従来の人事給与システムなどの守備範囲である。こちらは法規制もありどの会社でも同じように行われる業務で、他社が成功したモデル、ベストプラクティスを導入することで効率化を追求する分野になる。もう一つの人事機能である戦略人事は、独自の打開策を立てて他社との差別化を実現していく分野で、こちらがタレントマネジメントシステムの範囲となる。

タレントマネジメントシステムの典型的な実現効果としては、人材情報を一元管理して可視化することで、埋もれていた人材を発掘し人材活用機会を向上できる

ということや、配置の適正化、育成の加速・高度化などが挙げられる。

二つ目のHR Tech は、ピープルアナリティクスによる示唆の抽出や人事施策の立案である。人事の世界でも、あらゆる人事データをインプットして分析し、戦略的に活用するということが始まっている。例えば、昇格の審査などでは、合格・不合格という結果だけではなく理由などの情報を蓄積して分析し、新たな示唆を得ることにより新たな人事施策を打つことができるようになる。さらに、新たな人事施策を打つことにより発生する情報も蓄積していくという好循環を作っていくことが、ピープルアナリティクスという取組みに於いては重要である。

例えば、その部門の仕事が向いていなかったり、上司や部下とそりが合わなかったりしてパフォーマンスできないといったケースがある。伸び悩んでいる社員が、どの部門のどのマネージャーの下であれば活躍できるのかを、データの力を使い科学的に行う取組みが出てきており、さらにパフォーマンスを予測するところまでできている。それによって、伸び悩んでいた社員が、より活躍できる環境に異動してパフォーマンスしているということである。

三つ目のHR Tech は、AIによる人材アセスメントの自動化で、動画を使って採用面接を行い、AIが判断するということである。何を話しているのかをテキストデータにしてどのような言葉が使われているのか分析し、音声データでは声の大きさや抑揚などを、そして動画データから顔の表情などを分析の対象としてAIが判断する。現在活躍されている方々を教師データとしてAIが勉強して、同じような特徴を持った人たちを動画から抽出するという手法になっている。

AIによる自動判断による効果は、大きく二つある。一つは、判断精度の向上である。人の面談以上の精度が出せるのかとよく聞かれるが、先進的な取組みで検証されているケースでいうと、結果的には「できる」ということである。従来の専攻手法と比べて圧倒的なデータ量を

活用することと、人が介在しないためいろいろなバイアスを排除することができるため、高精度の判断ができると言われている。もう一つは、業務の効率化である。最初に機械が判定し、活躍する可能性が高い人から順に最終選考を進めることができる。選考工数を削減し、面接する対象者が少なくなることで、一人一人に一層丁寧な面接を行うことができ、より納得感のある選考ができるようになっていく。

欧米の事例として、ヒルトンホテルでは、かつての選考プロセスは、エントリーシート、書類選考、適正検査、一次面接、最終面接であったが、録画面接と最終面接のみとしたところ、最終面接進出者が6割減となった。面接の時間を削減することができ、選考期間も短くできるため、競合に取られるリスクも減ったということである。実際に欧米の先進的な取組みとして始まっており、導入する日本企業も出てきている。

### ●まとめ

企業の活動においてテクノロジーが不可分になっているのと同様に、今後は、人事の分野もテクノロジーなくして存在しえない。HR Tech の活用により、より本質的な業務にシフトすることができるようになる。機械で行うととても無機質だと感じる方もいらっしゃるが、私は逆だと思っている。テクノロジーを活用することによって、人事の方がこれまで縛られていた雑務から解放され、より一人一人の社員と向き合う時間が増えるだろう。

完全に無機質なものになっていくわけではなく、最終的な判断は人がやる。全自動で機械が行うのは当分先の話である。テクノロジーは、人がやっている気付かない選択肢を提示してくれるため、今までできなかったような判断ができるようになり、さらに、データの後ろ盾によってより説得力のある仕事になっていくだろう。最終的には、個々の社員に着目した、心の通う人事実現の第一歩になると言えるのではないだろうか。

「宗教の政治経済学」

愛知大学 文学部  
教授 伊東利勝氏

●はじめに

ミャンマー、タイなどを訪れると、林立する仏塔や立派な宗教施設を目にする。私などは、何とむだなことを、と思う。そのようなお金があったら、インフラの整備や経済の発展に投資すればよいのに。

これら上座部仏教に限らず、イスラームやキリスト教においても、壮大なモスクや教会堂が建てられてきた。いずれも贅を尽くし、歴史的建造物さらには世界遺産になっているものも少なくない。それらは教えや宗教者の権威を誇示するためのものであるのか。

仏教、イスラーム、キリスト教は、国家や民族などを超えて広く信仰されてきた。それぞれ、教義には違いがあり、特にイスラームとキリスト教では、その内部においてさえ正統あるいは異端として否定しあい、紛争が絶えまなかった。近年では、仏教徒さえもこれに加わるようになっていく。

これらの宗教は始祖や教祖、開教の時期、經典、実践形態などが大きく異なる。そのため、相互にまったく異質のものとして扱われてきた。しかし、その政治経済学的意味に着目すると、そこには同じような姿が見えてくる。いずれの宗教も、社会格差の是正のため、という点では一致していたように思う。

●動因としての功德・贖罪

宗教は「心の平安」もたらすためのものである。功德が積めたという手ごたえによって、アツラーの思召しにかなったという確信によって、もしくは罪が洗い流されたと実感することによって、そして死後は永遠の福楽の世界に赴けるという期待によって、心が穏やかになる。

上座部仏教で功德は寄進によって、イスラームではアツラーによる褒賞がザカートやサダ



伊東利勝氏

カによって、キリスト教では贖罪が喜捨によって、得られるとされている。金額は多ければ多いほどよい。人間は戒を破り、罪を犯す存在である。戒を破り、罪を犯すと、悪いことが降りかかり、罰を受け、罪悪感が消えない。悔悟の念は積み重なり、時には社会生活に支障を来す。

苦、とりわけ良心の呵責や罪悪感は、人間共通の悩みであり、これからの解放を求める結果として、立派な仏塔や宗教施設が出来上がっていると考えることができるのではないだろうか。

●物欲から離れる

寄進とは、上座部仏教の場合には、仏塔や寺院を建立する、得度式を主催する、寺に井戸や鐘を寄贈する、お坊さんに食事を提供することなどである。得度式は我われにとつて馴染みがないが、男児を仏門に入れるための儀式で、シッタラ王子の出家を豪華に追体験させる。

つうじょう仏塔建立が徳を積み最高の手段とされ、これに寺院建設、得度式主催が続く。仏塔を建てるには莫大なお金がかかるので、投じられる私財も半端ではなく、従つてたくさん徳が積めるということである。ただ、金額の多寡に、功德の量が比例する、つまり「地獄の沙汰も金次第」というのではない。

例えば、とても貧しい者が、ほんの少量にしかならないが、自分の着るものを我慢し、これをお布施にまわせば、数十億の資産を有する者が百万円寄進することより多くの徳を積むことができる。つまり寄進する物が自分にとつていかに掛け替えのないものなのか、自分の欲をどれだけ抑制できたのか、ということにかかっているという。

イスラームのザカートとサダカは、どちらも喜捨である。ザカートは所得税のようなもので、サダカは慈善行為といつてもよい。これもまた財産の一部を信仰の証しとして差し出す。特にサダカは、社会的弱者や貧困世帯への配分、モスクの建設・改装などにも使われ、会葬者に対する喪主のふるまいもこれにあたる。コーランには、「己が心の貪欲にどこまでもうち克つてこそ、栄達の道に行ける」というもの」というアツラーの教えが示されている。栄達の道とは、究極的には天国に行けるということであろう。

キリスト教では、教会が発行する贖有状を買うことで、自分が犯した罪にたいする罰が免じられた。獲得した財を教会に差し出すことにより、抱えている罪悪感

や、良心の呵責が少しは和らぐ。もともと罪の赦しを受けるために、祈り、断食、献金などの善業をおこなっていたが、徐々に、何日間断食する代わりにいくら差し出せばよいとなってきたという。

結局、身を切るような思いをしたときに、これだけやったのだから自分の罪は赦されただろうというところで、自分で自分を解放していたのだと思う。相手に対して感謝料を払つても自分の心の中に罪の意識は残るが、宗教的「善業」によって荷を軽くする。仏教が、煩惱の起る根本原因は物への執着だとするのはよく知られているが、どの宗教にも共通するのは、「物への執着から離れなさい」ということであることがよくわかる。

●世界の構造と死の意味

そして、この「物への執着から離れなさい」という教えは、つうじょう死後の世界との関連で語られる。我われは死について不安や恐れをもっているため、これは迫真力をもつ。死は誰にでも分け隔てなく訪れるので、このことについて考えない者はいない。

仏教で、この世は「苦の世界」だと考える。どれほど満ち足りた気分になつても、必ず欲（不足）が押し寄せてくる。仏教の説く世界で、生きとし生けるものは五道（地獄・飢餓・畜生・修羅・人間・天上）の間を上下しながら、前世・現世・来世によって構成される円環をグルグル回っている。生あるものは、死んだら必ず何らかの形でまた生まれ変わるという。死はすなわち生。いかなる形にせよ、五道に出現する限り、苦から逃れることはできない。

この輪廻転生における個の存在を規定しているのは自分自身で、自らのおこないによって現世や来世での状態が決まる。つまり因果応報、自業自得。神や仏など超自然的な力に頼つても、どうにもならない。そして輪廻転生の中にある限り、どんなによい状態で生まれても、苦はつきまとう。従つて、苦のない世界（涅槃）に行きたいということになれば、輪廻から解き放たれる必要がある。その方法はただ一つ、計り知れない徳を積むこと。積尊がそうであったように。

徳を積むということとは、悪徳は積まないということ。悪徳は、基本的には殺生、偷盗、邪淫、妄語、飲酒などで生じるので、先ずはこの五戒を守らなければならぬ。因果応報の理の怖いところは、積んだ悪徳は、功德によって帳消しにならないということである。悪い



ことをしたら、必ず悪い結果が起こる。罪悪感もその一つといつてよい。

イスラームやキリスト教の場合は、仏教とは少し違う。前世という考え方はなく、現世は「かりそめの世界」とされる。息を引き取ったあとに、永遠の生(天国か地獄)が決まる。イスラームの場合には、アッラーの思召により、楽園(天国)か火獄(地獄)に行く。キリスト教では、復活・再臨したキリストが最後の審判によりこれを決める。安らかに眠りくださいというのは、その時まで、一時的にお墓の中で眠っていてくださいということである。

イスラームには、六信五行という考え方があつた。六つ(こと)アッラー・天使・啓典・預言者・来世・予定(定命)を信じ、五つ(こと)信仰告白・礼拝・喜捨・断食・巡礼をおこないなさいと教える。これを守らないと天国には導かれず、永遠の地獄に落とされてしまう。ザカートやサダカとして自分の蓄積した財を放出すれば、アッラーから罪を赦され、来世で楽園に行くことが約束されるといふのである。

キリスト教では、人間は原罪をもつて生まれ、生きて次々に罪を犯してしまふという。罪を犯すと罰が与えられるが、これから免れるために喜捨、たとえば贖宥状を購入する。「もし完全になりたいなら、行つて持ち物を売り払い、貧しい人に施しなさい。そうすれば天に富を積むことになる」。これは4世紀にミラノ司教が説いた言葉で、蓄財するより喜捨として差し出せば、それによって心の平安が得られるという。修道院を建てる際の寄進状には、「わが魂とわが親族の魂のため」という言葉が必ず入る。罪多き魂が神によって赦されるよう、財をなげうつのである。

廻向もまた同じ。「願わくはこの功德をもつて……」というが、廻向の対象とされた死者の魂は、自分のために為されるこの行為に感激(随喜)し、それが積徳に結果する。功德が移転するわけではない。しかも、対象者のみならず、これを為した人も、そのことが功德となる。贖宥状の場合も同様で、死者のためにこれを購入することで、両者共に魂の赦しが期待できた。葬送でのサダカも、これを為した親族のみならず、死者に対してもアッラーから褒賞が与えられると理解されている。

このように、何れの宗教にあつても、手を変え品を変え、死後の世界を視野に入れ、蓄財の放出、金品に対する執着から離れることの意味を説いている。もちろん信じることではないかの問題ではあるが、だれもこの原理を

「実証的」に否定することはできない。逆に、人は、他に物を与えることによって幸せな気分になるといふのは、「科学的」に証明されている。

## ● 社会格差の是正

個人が築いた富は、これを特定の貧者や生産インフラに対するより、宗教施設に投入することが推奨される。そういうと「坊主丸儲け」のためのからくりではないかと思われるかもしれない。

しかし上座部仏教のお坊さんは、財産を持つてはならない。三衣一鉢というように、彼らの所有物は衣と食事を受けるための鉢だけで、寺や土地そして仏塔も公共財である。キリスト教でも、修道院生活のモットーは清貧と禁欲であり、生産事業を展開することとはなかった。つまり宗教施設は消費の最終形態で、そこに財がいくら投下されても、新たな利潤を生みださない。

こういった富を生み出さないものに対して、個人の蓄財を配分していく。お返しを期待できない相手に対する贈与といつてもよい。ところが、寄進や喜捨によつて金色に輝く仏塔が建立される、盛大な得度式が挙行される、はたまた豪華な教会堂が建てられるとなると、そこにいるいろいろな資材や物資が購入され、各種職人や労働者が雇われ、運送業界も潤う。つまり有効需要が創出されていく。この過程で、支配階級や大商人など、一部にかたよつていた富が、再配分されることになる。

もちろん再配分を通してまた新たな富の偏在が起こるが、人間に良心の呵責や、死後の安寧を願う思いがある限り、寄進や喜捨という回路を通つて、富は限りなく配分され続けていく。つまり宗教に結びついた、寄進や喜捨、そして贖罪という考え方は、富の集中を抑止することを意図して組み上げられた深遠な思想であるといつてよい。

ただ、ここに見られる富の流れは、単純再生産のそれであつて拡大再生産をもたらしえない。利潤を限りなく追及する資本主義とは相いれない考え方である。富を、さなる財や利潤を生みだすものに対してではなく、心の豊かさに投資しているということである。

## ● おわりに

寄進や喜捨の動機は、現代とは真逆で、全ては自分のためだと思つてなされる。そして、それが結果的には人のためにもなつていく。さわめて個人主義的で、無理がない。財産を子供に残すことなど考えず、自分の来世の

ため、これを使つて仏塔を建立する。現世では親子、兄弟であつても、それぞれが別々に輪廻転生を繰り返す存在にすぎない。すべては孤独な旅人である。この世では家族であつても、来世はまた別の縁が待ち受けている。

壮大な仏塔や教会堂が立つたのは、自らの解脱や贖罪を志向した結果である。親族や衆生のためというのには、付け足しにすぎない。しかしそのことによつて、富は広く行き渡り、社会は安定に向かう。

ところが現代は、まずは日本人のためあるいは日本国家のためであり、日本民族のためにあなたは死になさいといった時代もあつた。殿や家族、恋人のためではない。自分の事よりも、国家や社会のためにということが称賛される。何も日本に限ったことではない。自分を捨てて、国民のために尽くすことを美德とし、ある意味これを強制する社会になつていく。

功德や贖罪を機能させたメカニズムが崩壊するのは、一つには比丘が三衣一鉢で生活をしなくなったといふことがある。私財を蓄積し、煩惱にまみれた宗教者に、寄進したいとは思ひも思わぬ。ただミャンマーやタイなどでは、未だこういう社会が、存在している。そこでは、お坊さんが227条の戒律を守り、在家がこれを支えている。

しかし、これもいまや風前の灯である。19世紀以来、諸外国から押し寄せる資本主義の波に洗われ、仏塔や寺院の建立につき込む財を、生産財や国力の増強へ回さなければ、やつてゆけない。キリスト教の場合も、資本主義の精神を基礎付けけるカルビンの「予定説」を生み出し、欧米諸国は帝国主義社会へと展開していった。

宗教と現代社会は相いれない。それは仏教、イスラーム、キリスト教が国民国家が成立する以前に形成されたといふこともあろう。宗教によつて心の平安がもたらされ、これが結果的に、社会の安定をもたらしつたといふのは、いまや遠い昔の出来事となつてしまつた。

## 参考文献

- 伊東利勝編著2018  
『功德と喜捨と贖罪—宗教の政治経済学』  
愛知大学人文社会学研究所

## 「地域企業連携プロジェクトの取り組み のんほいパーク盛り上げ隊」の 活動を通して」

豊橋創造大学 経営学部経営学科  
准教授 三輪多恵子氏

### ●SOZOプロジェクト

#### ・地域企業連携プロジェクト

地域企業連携プロジェクトとは、文部科学省などが推奨するPBL(Project-Based Learning)による体験型学習の一つである。希望者のみが参加する同様のプロジェクトを行っている大学もあるが、本学は小規模大学であること、地域の厚い協力を得られることから、3年生全員が通年の必修科目としてプロジェクトに取り組んでいる。

地域企業や自治体の協力の下、学生自身が提起した課題や問題に真摯に取り組み、問題解決までの課程でさまざまな能力を育成するという趣旨で設けられた授業である。PBLは問題解決型授業と訳され、アクティブラーニングの手法の一つとされる。本学のプロジェクトでは、複数人の学生がチームを組み、調査・議論を行って問題解決に取り組み、教員は方向修正のための助言など支援を行う。一般的な座学とは全く異なる形態の授業である。

活動を通じて、アカ

デミックスキルズと仕事能力、つまり社会人基礎力を養成することを目的としている。社会人基礎力とは、経済



三輪多恵子氏

産業省が2006年から提唱している社会で働くために必要な3つの能力と12の能力要素で、プロジェクトを通じてそれらを身に付けることが、本プロジェクト活動の最大の目的である。座学では養成することが難しい、主体性、実行力など「前に踏み出す力」、計画力や課題発見力などの「考え抜く力」、そして役割分担してスケジュールを管理し、全員が情報を共有して前に進んでいく「チームで働く力」を、チーム活動を通して養成したいと考えている。

#### ・これまでの主な取り組み内容

平成29年度は、4つのプロジェクトに取り組んだ。一つ目の「SOZO SOCKS STATION運営プロジェクト」は、店舗のレイアウトや新商品の仕入れなどの全てを学生が考え、1年間店舗運営する活動である。そして本日ご紹介する「のんほいパーク盛り上げ隊」は、今年で7年目となる活動である。また、喫茶店・モーニングの発祥の地は名古屋ではなく豊橋だという説があり、「Cafeの町豊橋」として豊橋でカフェを盛り上げる活動を行った。「豊橋エコタウン・プロジェクト」では、豊橋市内小中学校に設置された太陽光発電システムの稼働状況を調査している。現在、豊橋市内の全ての小中学校に太陽光発電システムが設置されているが、故障しても修理されず稼働率が低いままという問題があり、8年前から毎年稼働調査を行っている。

平成28年度以前にも、大学生による小中学校でのプログラミング教育や、介護施設でiPadを活用して認知症の改善を図る取り組みなど、地元密着の活動を行っている。毎年1月にはプロジェクト発表会を開催しているため、興味のある方はご参加いただければと思う。

### ●のんほいパーク盛り上げ隊！

#### ・活動の目的

のんほいパーク盛り上げ隊は、平成24年から活動を始めた。主な連携先は、豊橋総合動植物公園（愛称・のんほいパーク）と、植物園を管理する豊橋みどりの協会の2つである。活動の目的は、のんほいパークをPRし、来客数を増やして盛り上げる事である。連携先からの依頼には柔軟に対応し、市役所のラジオ出演などの連携活動も行っている。

平成24年の活動開始時点で気付いたことは、広報の問題である。のんほいパークの公式チラシは、市内の幼稚園、保育園、小学校に配布される。広報とよはしにも情報が出ているが、広報を熟読するのは年配の世代が多い。当時の公式ウェブサイトは地味で情報量が少なく、ポスター等の掲示を街で見掛けることはほとんどなかった。つまり、情報が届くのは小さな子どもがいる世帯や年配の世代に限られ、広報の存在を知らない若者世代（10代後半から20代）には届いていないのではないかということである。

そこで、ウェブを活用し、大学生（若者）目線、市民目線で情報発信する活動を始めた。「TwitterやInstagramなどのSNSは当時まだ広まっていなかったため、ウェブサイトを作り、動物情報や飲食店情報などを掲載した。周辺で食事ができるお店が分かれば集客につながると考え、実際に二川駅周辺の飲食店取材して交渉し、許可が得られたお店の情報掲載した。

2年目の頃から、学生のアイデアでFacebookやTwitter等のSNSでの発信や、YouTubeで動画配信を始めた。3年目には、植物園と共同で睡蓮の池のザリガニ駆除を行った。この年にプログラミングができる教員が新加入したため、動物の出身や生年月



日、名前などを全て登録して、当時は公式ウェブサイトにはなかった動物データベースを作成した。われわれのデータベースが完成した頃に、公式ウェブサイトにも動物のデータベースが公開されたが、異なる情報もあるため両方活用していただきたいと思っている。

活動4年目には依頼の種類も増え、こちらからの提案も受けてもらえるようになった。プロジェクトメンバーにイラストが得意な学生が多かったため、のんほいパーク公式LINEスタンプのデザインを提供したり、夏の夜のナイトガーデンのイベントで、公式クイズラリーの問題を学生が作ったり、ブースでの接客体験などを行った。昨年は、市役所からの依頼で市の広報ラジオ番組に出演し、豊橋市中央図書館で行われたまちなか図書館のプレイベントにも出演した。長く続けることで、活動の幅が広がることを実感している。

最初はお客様目線での要望を発信することから始めたが、2年目以降は、来園したい気持ちにさせる情報を学生と一緒に取捨選択して発信している。そういった情報を発信するうちに、3年程前からSNSを通して全国の動物好きの方と交流できるようになってきた。

### ・これまでの活動

通常の活動で最も重要なことは、現地取材と動物好きの方に最新の情報を伝えることである。メンバー全員で行く取材と、学生が一人でカメラを持っていく取材もあるが、年間平均40〜50回ののんほいパークを訪れており、プロジェクト期間中は毎週一回以上取材している。学生はいつも笑顔で、楽しんで取り組んでいる。新しいキリンが来た際には、情報発信のためのインタビューを行い、餌やり体験も行った。2016年にはカワウソウ等、昨年はサルデッキの取材を行い、飼育員の方たちには忙しい中で温かく対応していただいている。

豊橋市中央図書館で開催されたのんほいパークの魅力を紹介するイベントでは、学生がプレゼンターとし

て一般のお客様の前で講演する機会をいただいた。大学の座学ではできない貴重な体験である。

これまでの成果物は、ウェブサイトの動物データベース、SNS、各種ポスター、LINEスタンプなどたくさんある。Facebookのフォロワーは1700人を超え、Twitterのフォロワーは1400人まで増えた。Twitterは週に2〜3回更新し、一日に5〜6記事を出すよう計画している。また、FacebookやTwitterの動画を蓄積していく場所として、YouTubeを利用している。YouTubeのチャンネル登録数は91で、こちららほもつと増やしていきたいと考えている。昨年始めたインスタグラムは、フォロワー数はまだ200人だが、週に2、3回更新して一押しの写真を出している。SNSを通じて、動物好きの方との交流が進んでいる。ポスターは、平成24年の活動当初から描いている。ナイトガーデンでは、公式ポスターは子ども向けのデザインで描かれているため、若者向けに大学生目線で楽しめそうなイベントを推している。夜のおしゃれな動物園をアピールするポスターをデザインし、本学だけでなく、豊橋技術科学大学と愛知大学にも毎年掲示させていただいている。私が大学でビジュアルデザインの担当をしている関係で、ゼミ生に絵やデザインが好きな学生が集まるため、このような活動が可能となっている。

一昨年から、冬季集客のためのイベントとして、写真コンテスト「のんほいフォトアワード」を盛り上げ隊が企画運営している。先日、2回目の写真コンテストが終了した。学生の発案ではあるが学生だけではできないため、園長や飼育員の方たちにも審査委員として協力していただいております。賞品ものんほいパークの提供である。

LINEスタンプとフォトアワードは、豊橋のために頑張る大学生として、いくつかの新聞にも掲載され

た。昨年度は、テレビ番組に動画コンテンツを提供し、メーテレの番組ではのんほいパーク盛り上げ隊のテロップ付きで放送され、学生のやる気につながっている。

### ・活動を通じて

プロジェクト活動では、一年間でいろいろなところと連携し、いろいろな体験をするという方策もあるが、長く継続することで、信頼関係が蓄積されて出ることが増えていく。初年度は、のんほいパークとの連携だけであったが、市役所などからの依頼に対応して活動の場面が広がり、一般の方との交流もできるようになり、大学の中のみでは得られないさまざまな体験をすることができるようになった。

本活動の中心はPR活動だが、さまざまな体験知や経験知を学生に身に付けさせることができる。例えば、Twitterなどでは、動画過多や記事の出し過ぎもフォロワー減少を招くといった経験から、記事を出す時間や写真と動画の割合を学んだ。2日から3日に一回程度、写真5枚に動画一つ、動画二つに写真一枚で記事は三つが良いなど、経験として積み上げていった。効果的な広報活動について理解し経験することで、SNSを活用した広報活動の現場でもすぐに活躍できる人材に育っていると考えている。

私自身ののんほいパークが大好きで、学生と一緒に飼育員の方の話を聞いたり、バックヤードに入らせていただいたりする機会があり、年に何度もプレミアムな体験をすることができた。学生に貴重な経験と体験をさせることができ、のんほいパークにはとても感謝している。このような経験をいろいろな場面に広げていくことは、学生にとって多くのメリットがあるため、皆さまからお声掛けいただければ幸いです。

「東三河の経済を支える三河港」

国土省 中部地方整備局 三河港湾事務所  
事務所長 平澤 興氏

●「みなと」とは？

島国の日本では、港は重要である。輸出入貨物量の99.7%は港からの海上輸送で、港湾が日本の暮らしを支えているといえるだろう。航空貨物量は0.3%であるが、半導体など重量に対して付加価値の高い物が多いため、貿易金額では2割程度を占めている。

港の施設といえば、岸壁とクレーンだけをイメージしがちだが、防波堤や船が通るために海の底を掘って造った航路や泊地など、さまざまな施設が集まって港という一つの施設を構成している。

船には、コンテナ船、一般貨物船、客船、自動車専用船、タンカーなどの種類がある。この地域のコンテナ船の出身は、やはり自動車部品などが非常に多い。三河港では、建材などの取引も多く、その他、さまざまなものがコンテナ船で運ばれている。

●地域の経済を支える三河港

製造品出荷額の状況を見ると、全国の製造品の4分の1が中部地方で造られており、その大半が愛知県である。愛知県がいかにか日本経済を支えているのかが分かるだろう。愛知県の製造品出荷額約45兆円の中で、東三河地域は大きなシェアを占める。この45兆円には海外貿易も多く含まれ、そのほとんどが愛知県内の港から輸出されている。

愛知県内には、名古屋港、衣浦港、三河港の三つの主要な港が



平澤 興氏

ある。三河港は、湾の奥で環境に恵まれているため、江戸時代から盛んに利用されてきた。明治時代にかけて神野新田が干拓され、1962年に豊橋港、蒲郡港、西浦港、田原港が合併、港湾法上の三河港となった。後に埋め立て事業で土地が広がった三河港はかなり広く、温泉のある西浦地区から蒲郡地区、大塚地区、御津地区、神野地区、明海地区、田原地区と、それぞれ特色ある地区で構成されている。水域面積は132平方キロメートル。堤外地には624の事業所があり、約3万5000人の従業員が働いている。港の企業と関連する産業は内陸にも多くあり、港が経済を支えている。

年間2千万トン弱の貨物を取り扱っており、三河港の取扱貨物量は全国34位である。貿易額では全国10位で、重さに対して貿易額の順位が高いのは、価値の高いもの、つまり完成自動車を扱っているからである。三河港の輸出の主品目は完成自動車であり、世界の完成自動車取扱港第5位で、日本では、世界第3位の名古屋港に次ぐ自動車港湾である。

自動車輸出はリーマンショックで落ち込んだが、その後回復傾向にある。輸入車についても、最近増加傾向となっている。完成自動車を取り扱う全国主要港に占める三河港の割合は、輸入台数は第1位(53%)、輸出台数は名古屋港に次いで2位である。

港湾別の輸出では、大きな自動車メーカーの工場のある広島港や荻田港、メーカーが集約している横浜港や名古屋港が非常に大きい。三河港では、蒲郡地区で三菱自動車、神野地区でスズキ自動車、田原地区でトヨタとレクサスと国内メーカー4ブランドを取り扱っている。輸入車の取扱ブランドは多く、BMWを除くほぼ全てのブランドを扱っている。

一方、コンテナ取扱貨物量は低迷している。定期コンテナ航路は、主に東南アジアや中国へ毎週出ているが、一時期は7万5千個程あったコンテナ取扱貨物量が、現在は4万個台にまで減っている。名古屋港や清水港を利用するなど、各企業それぞれの戦略で物流をさ

れていると思うが、ぜひ地元の方にもっと三河港を使っていたらと思う。

国土交通省では、三河港で多くの事業整備を行っている。伸びゆく完成自動車の取り扱いに加え、地域の方に利用される輸出入の拠点としてインフラ整備を進めており、神野地区のふ頭再編事業もその一つである。再編前の神野地区3号、4号、7号岸壁では、例えば、高級外車の隣に鉱物などの一般貨物が置かれて車が汚れるといった、非効率な物流のためにコストが上がってしまうなどの問題が生じていた。ふ頭再編事業は、完成自動車の取扱需要の増加や船舶の大型化にも対応するため、7号岸壁を延伸するとともに、ふ頭内の混在等を解消するものである。昨年度末に工事を終え、最終調整をして6月に完成する予定である。また、災害時には緊急物資輸送の拠点として、さらには復興に向けた物流の拠点となるよう、大規模地震にも耐え得る耐震強化岸壁として整備した。

三菱自動車の輸出拠点となっている蒲郡地区でも、愛知県が自動車専用船の大型化やクルーズ船の受入に対応できるよう岸壁の整備を進めている。蒲郡地区では、クルーズ船「ばしふいっくびい」が何度か寄港しており、平成31年には一回り大きな「ダイヤモンド・プリンセス」の初寄港が予定されている。今後は、さらに多くの外国人クルーズ客を受け入れる観光拠点としても機能していくことになる。

「ばしふいっくびい」の寄港時に行われた、観光物産展や手筒花火でのお見送りなどが非常に好評で、こういった取り組みはクルーズ船の誘致につながる。近隣では、名古屋港や清水港にも多数のクルーズ船が入港しているが、三河港でもクルーズ客を呼び込み、地元の経済活性化につなげていきたいと考えている。寄港予定の「ダイヤモンド・プリンセス」は非常に大きいため、1000人単位の乗客が乗った船をどのように受け入れるのが今後の課題である。



## ●世界の物流の動向と、港湾の中長期政策 『PORT2030』

港湾は、世界の物流の先行きを考えて戦略を立てていかなければならない。国土交通省では、今後の港湾政策について、中長期政策の策定が進められている。全てが三河港に当てはまるわけではないが、今後の三河港の方向性を議論するヒントも含まれているだろう。

中長期政策の中で、2030年に向け我が国が直面する課題がいくつか挙げられている。まずは製造業の生産拠点の南下である。これまでチャイナプラスワンと言われていた製造業の拠点がASEAN地域に展開されており、物流もこれに対応しなければならぬ。また、訪日外国人が急増し、訪日クルーズ客も2年前に比べ5倍となっている。2020年までに500万人を目指すという政府目標もあり、人の流れも変化している。

人口減少でトラックドライバーが不足する中、国内の貨物輸送についても、海運や鉄道が見直されるといった変化もあるだろう。人口減に対応する自動隊列走行や、工場や倉庫の無人システム化なども進められている。

日本は世界のLNG消費量の3分の1以上を占めているが、最近では中国や韓国などの消費も増えており、資源獲得競争に勝つために輸送コストを下げる必要がある。また、港湾施設は他のインフラと同様に整備後30〜40年経過しているものが多く、施設の老朽化についてもより一層対応していかなければならない。

そういった課題を抱える中で、釜山や上海の台頭によって世界の基幹航路から日本が外されつつあり、例えば、日本から北米へ輸出する際に、釜山や上海を経由しなければならぬ状況が発生している。その他にも、我が国の港湾を取り巻く情勢として、コンテナ船の大型化や船会社のアライアンスの再編、一帯一路構想や北極海航路の開港などがある。船の通り道が変われば物流も大きく変わっていくだろう。

今後の政策の方向性として、日本の港の8本柱となる政策が議論されている。グローバルバリューチェーンを支える海上輸送網の構築として、小口で頻度を上げ、企業の需要に応えられる航路を構築すべきだということ。そして、国内物流体系を港で支え、クルーズにも対応し、港のまちづくりを行う。企業間連携による巨大船一括大量輸送でコストを下げ、新たな資源エネルギーの受入拠点を日本全国に適正に配置する必要もある。また、船の燃料がLNGに変化するのに合わせ、港でもその供給設備を整備しなければ、そもそも日本に寄港できなくなってしまう。その他にも、IoTやAIの活用など、さまざまな施策を打つ予定である。

### ●これからの三河港

三河港の港湾計画の改定に向けた議論の中で、三河港を盛り上げ、最終的にはいかに使いやすい港にしていけるかを考えていかなければならない。公共事業費は非常に切迫しており、全ての港の整備に投資することは難しいため、国土交通省としては投資先として優先度の高いものを選ぶ必要がある。費用対効果分析だけでなく、港の整備による民間投資の喚起、雇用や経済への波及効果なども念頭に置いているため、港の整備によって工場の新設や増設の話があれば着手しやすく、それが皆さまでへの還元につながることになる。

他港の事例を紹介する。茨城県の常陸那珂港では、コマツや日立建機など大手建機メーカーによる新たな生産拠点が整備され、2150人の新規雇用が生まれた。また、北関東自動車道の整備によって、内陸部のSUBARU(群馬県太田市)から、常陸那珂港を利用して完成自動車の輸出が開始された。港の整備に伴い、二つ県を飛び越えた群馬県での工場の投資へとつながった。三河港でも、広い範囲から貨物を集め、より広い範囲への経済波及効果を考えることもできるだろう。

北海道では、農水産物の輸出支援も行っている。海外で日本産の付加価値は高い。例えば、フィリピンのスーパーでは、中国産の1個10円のりんごも並んでいるが、

富裕層には山形県産の1個400円程のりんごが飛ぶように売れていた。日本は、それだけ高品質のものを作っているということだ。個別輸出ではなかなか難しいため、北海道各地の漁港と苫小牧や石狩湾などの大きな輸出港が連携し、各漁港に冷凍設備を整備して、集約して輸出拠点港から輸出しブランド化する取組みを行っている。そういったビジネスモデルを成立させるために、港湾整備を進めているところである。

農産物については、清水港と長野県が連携している例もある。農産物輸出額1位を誇る東三河地域でも、海外に目を向けて、素晴らしい農作物を輸出するお手伝いが三河港でできればと考えている。皆さまでのご意見を伺いながら、将来の三河港をつくっていききたい。

※この講演は4月17日(火)に行われました。

生活にフラインクオリティ

sala

美しく快適な人間空間づくりを通し、  
地域社会から信頼される企業グループとして、  
豊かな社会の実現をめざします。

中部ガス株式会社

## 「シビックテックによる街のスマート化」 ～豊橋市での活動について～

豊橋技術科学大学 情報知能工学系

講師 大村 廉氏

### ●研究活動

私の研究室名は「ユビキタスシステム研究室」で、日常の周囲にある「物」をスマート化し、人の活動の支援や補助を行うシステムの開発を行っている。ハードウェアの開発からAI技術を用いたデータ処理、物の認識などを包括的に行っており、IoT（モノのインターネット）という言葉で総括されるだろう。研究室では、パーソナル／ウェアラブルスケールシステムグループ、ホーム／オフィススケールシステムグループ、アーバンスケールシステムグループといったグループで活動している。

### ●研究内容

#### ・看護師支援システム

病院の環境をスマート化し、看護師の業務を補助する「看護師支援システム」の開発について、10年程前に京都の研究所で携わった。「誰が、いつ、どこで、何を」使って」といった情報をセンサーで自動的にセンシングして業務記録として残し、業務分析や業務改善だけでなく、事故の予測やその防止などにも使おうというものである。

看護師が赤外線IDを発信する髪留めを着けて、そこから発信されるIDを病棟全てのドアを通過した際に検知し、誰がいつどこにいるのかを検出する口



大村 廉氏

ケーションシステムを作成した。また、無線電波を発信する装置を看護師の腰に装着し、その周囲1〜2メートルの間に何があるか、何を使っているのか、誰と一緒にいるのかを検出するシステムや、より詳細に検出するためには、薬剤を入れるアンブルにRFIDタグを貼り、アンブルに触ったことを検出する技術を開発した。そして、加速度センサーを看護師の両腕、胸、腰などに着けてデータを取得し、AIの技術を使いどのような動きをしているのかを推定する技術を開発した。これらの情報を組み合わせることで、今、看護師がどこで何をしているのかを自動的に推定されて、データベースに保存されていくシステムとなる。

新人とベテランの業務の遂行の違いや、事故につながりそうな状況を分析しながら研究を進めてきた。ヒヤリハットや医療ミスにつながりそうな状況があった際には、そこに至るまでの経緯を蓄積してデータベス化することで、同じような状況によるミスや医療過誤の防止に役立てようというコンセプトである。

#### ・環境ノイズによる無電源人感センサ

豊橋に来てからは、要素技術の開発を進めてきた。その一つとして、家庭にある100ボルトの電源ラインの周りに漏れる電力を収集し、電源なしで人を検出するセンサーを作り、さらに外部の装置に通知するシステムの研究を行っている。実は、別の研究を進めていた時に、たまたま人がアンテナに近づくことと電圧のレベルが変わることに気づき、人検出に使えるのではないかとということで始まった研究である。

人がラジオに近づくことと感度がよくなることがあるが、人が近づくこととノイズレベルが変動し、ノイズレベルの変動により回路の出力電圧が変動する。その原理を利用して、人が周囲にいるかどうかを無電源で検出する。この無電源センサーは、省電センサーよりさらに低消費電力化してエネルギー効率を上げることができるとある。例えば、このセンサーを椅子に取り付けた場合、着席したことを自動で通知することも可能である。日刊工業新聞などにも取り上げられ、大変注目して

いただいている。

### ●シビックテックの推進

ここまでご紹介したのは、ウェアラブル（個人スケール）やホームオフィススケールの人の支援システムだった。現在、IoTやモバイル技術を使い、アーバン（シティ）スケールで人の活動支援しようという研究が活性化してきている。

スマートシティというと、エネルギーを中心として考えられる場合が多いが、生活サービス、高齢者見守りサービス、オンデマンド交通、コミュニティの活性化、活動の創出、伝統文化の保存などにも注目が集まってきている。スマートシティの事例としては、海外ではシカゴやコペンハーゲン、日本では千葉県柏市や神奈川県藤沢市などが有名である。柏市には東京大学のキャンパスが、藤沢市には慶応大学SF Cのキャンパスがあり、産学官連携のもと取り組みが進められているため、東三河地域でも、豊橋技術科学大学を中心にそのような活動ができないかと思っている。

市民自身がテクノロジーを活用して、行政サービスの問題や社会課題を解決する取り組みを、「シビックテック」という。全国で活動が盛んになっていて、神戸市や鯖江市などでは、Yahoo!や三菱総研、富士通、NECなどの大企業が参画して行われているが、あくまでも中心は市民である。日本全国で、シビックテックを推進するCode for 〇〇〇〇の活動が広がっている。豊橋にはCode for MIKAWAという団体があり、私も所属して積極的に活動している。

### ●豊橋市における取り組み

#### ・市民・学生による街の生活支援のサービス創出

学生や企業の方々、介護の現場の方々が集まり、介工（介護・工学）ハッカソンを行った。ハッカソンとは、ハッキング&マラソンの結合語で、いろいろな興味やバックグラウンドを持つ人が集まって新しいア



アイデアを創出し、マラソン形式で短期間の内に作業を行って成果を出そうというものである。介護士の方が実際の現場で困ったことに対して、どのようなテクノロジーのソリューションがあるのかグループワークを行った。

例えば、小児まひの車いすの方が、机の高さが合わずに自分で食事をするのができないため、介護士が段ボールにお皿を乗せて補助している。ところが段ボールが柔らかく食べにくいということで、集まった方々がサポートする木の台を作った。そこからお皿の形状が違ふときや、高さを変えたいときにどうするかという仕組みをつくり、さらに発展させている。また、聴覚障がいの子どものためのクリスマスコンサートでは、カホンを使って体で振動を感じてリズムをとれるようにし、視覚的な刺激を与えて合奏する取り組みを行った。

「豊橋3大学学生まちづくりハッカソン」では、豊橋市のそれぞれ特色ある3大学の学生の目線で、街のサービス創出のアイデアを出し、プロトタイプینگを行った。例えば、神社を中心としたコミュニティづくりの仕組みの開発を目指したアイデアなど、多くのアイデアが生まれた。昨年度は、ほの国百貨店で成果報告会を行った。また、ここで生まれた作品は全国的なコンテストで賞もいただくなど、大変注目されている取り組みである。

### ・伝統文化・地域文化と先端技術の融合

豊橋市によるオープンデータ事業の一環として作成した「のってみりん」は、路面電車やコミュニティバスの各車両にGPSを付けて、スマートフォンやパソコン上で現在地を確認できるものである。こういったシステムを応用し、豊橋まつり総おどりにおける各団体の位置を可視化した「おどってみりん」を作成した。豊橋まつりは来場者数2万人規模の大きなお祭りだが、総おどりの各団体の位置をスマートフォンなどで見られるようにして、今どこにいるのかを団体毎に検索できるシステムを作成した。

「鬼どい」では、豊橋鬼祭りにおける鬼天狗の位置を

可視化。鬼が今どこにいるのかをスマートフォンなどで見られるようにしたところ、鬼がいつ来るのか分かったと寒い中待たなくてもよい、何度も見に行くことができた、混乱なく見に行くことができるなどの意見をいただいた。当日は1765人のアクセスがあり、豊橋以外からも多くのアクセスがあった。豊橋から離れたところから鬼祭りに思いを馳せる、余韻に浸るといった意見もあり、新たな楽しみ方を提供できたのではないだろうか。その他、周囲の店などの情報も表示してほしいという意見も多くあり、このようなシステムを活用することで、地域の活性化につながっていくのではないかと考えている。

### ・交通・地図インフラの整備

先ほどお話しした「のってみりん」に表示する電車の絵を子ども達に書いてもらうイベントも実施した。実際にアイコンを「のってみりん」上で表示し、子ども達に興味を持ってもらうことができたのではないだろうか。

「プラトヨハシ」は、豊橋市街のオープンストリートマップを作ろうというイベントである。市民の手で作る地図はその地域の一番詳細なもので、他の地図にはないような情報も載っているため、「鬼どい」にも非常に役に立つ有益な地図となっている。

1000年以上続くといわれる牛川の渡しでは、「川王」というIT化・GTF化のイベントを開催し、「のってみりん」と同様に船頭さんの現在地を表示する、事前に連絡や予約をするなどといったアイデア出しを行った。国土交通省の標準的なバス情報フォーマットに、GIFSというGoogleが制定したフォーマットがベースとしてあり、そこに牛川の渡しを載せることも考えて行ったイベントである。Googleマップで検索した際に、牛川の渡しが一つの経路として認識されれば、例えば、海外からの観光客の方などがその交通経路を利用して移動できるようになる。その他にも、「柿部会ハッカソン」では、次郎柿生産者を支援するIT技術のアイデア出しなども行っている。

また、本学、ジャパン・トゥエンティワン(株)、豊橋市で、ビッグデータを活用した予防型安全対策という形で協定を結んだ。ジャパン・トゥエンティワン(株)が販売する運転警報システム(モービルアイ)の情報を、本学で解析している。警報システムを付けると、一時的には安全運転をするようになるが、それが継続しない人もいる。どのようなドライバーが持続しにくいのか、性格分析と照らし合わせて、どういった交通安全指導が適しているのかといったデータ解析等を行っている。現在は、業者対象の機器のデータだが、より広範なデータが集まればさらに詳細な分析が期待できるため、市民の皆さまにもご協力いただければと思う。

### ●最後に

本日は、街を舞台とした取り組みを紹介した。その他にも多くの事例があり、小学生を対象にしたIT教育授業なども行われている。東三河地域で、このような活動が活発化していることを、皆さんに知っていただきたい。私が活動しているCode for MIKAWAは、誰でも参加できる団体のため、興味がある方はぜひ参加や支援をしていただければと思う。

オープンデータは、会社や個人、行政などが持つデータをオープンにして、誰でも使えるようにする取り組みである。新しい街のサービスの創出や、ビックテック、市民がサービスを作るときには、オープンに使用できるデータが重要なインフラになる。オープンデータ戦略は総務省で推進するもので、豊橋市でも力を入れている事業である。「東三河オープンデータ(Open Data HIGASHI-MIKAWA)」のサイトもあるため、是非ご覧いただきたい。

# 「地方創生戦略の一断面」 「世代のリレー」ができるまち

新城市 市長 穂積亮次氏

## ●はじめに

日本の人口は、2010年の1億2800万人をピークに減少に転じたことは皆さまご承知のとおりである。しかし、高齢化も人口減少も全国均等には進んでいない。日本全体の人口は下り坂だが、名古屋近辺の人口はまだ増加しており、東京圏ではさらに大きな人口増加が続いている。頂点には達したが、全車両が昇り終えてはいないジェットコースターのような状態だといえるだろう。

いろいろな市町村の人口目標が出てくるが、人口増を目指すという幻想はどこからくるのか。人口減少に入った前方の車両ではなく、ジェットコースターの後方車両に移れば人口増加だという幻想があるのではないだろうか。われわれは先に人口減少の下降コースに入った地域である。社会の利害損失を冷静に判断し、思い込みと俗論を覆してみたいと思う。

愛知県の市の中で、新城市は唯一の消滅可能性都市である。北設楽郡の3町村も消滅可能性都市とされた。消滅可能性都市の三重苦は、「超高齢化」「若者減少」「財政難」である。これらが不均衡に進んでいく構造が、高齢化の進む社会にどのようなことをもたらしていくのかを考えてみようというところである。



穂積亮次氏

## ●年金世代から現役世代への所得再移転

高齢化が進んだ地域では年金所得が3割を占めるといわれており、中には村民所得の半数を年金所得が占めている村もある。「民間経済」「公共部門」「年金所得」がそれぞれ3分の1ずつを占めるのが、高齢化が進んだ地方都市の姿である。都市部などでは当然年金所得の比率は低くなるが、日本全体でみると、GDP 500兆円のうち年金支出は約50兆円で、1割程度が年金所得である。超高齢社会とは、「年金所得の地域経済に占める比率が拡大する社会」といえるだろう。

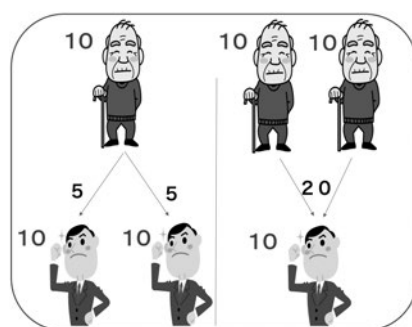
年金世代は被扶養者だという見方で制度論が語られているが、年金所得者は消費者であり、金融機関にお金を預けている間接的な投資者でもある。私のこれからの課題は、消費者・投資者としての年金世代に着目した地域経済社会モデルを開発することである。言い換えれば、年金世代から現役世代への所得の再移転を扱うということだ。年金世代の所得は、必ずどこかで現役世代に再移転していく。そこに着目した地域社会の構図を見ていく必要があると考えている。

## ●年金経済は「基盤産業」の一つに

2人の現役世代が1人の高齢者を支える社会と、1人の現役世代が2人の高齢者を支える社会を思い浮かべて欲しい。例えば、年金世代の高齢者に、10の年金収入がもたらされるとする。1人の高齢者を現役世代2人で支える場合は、現役世代が5ずつ負担すれば10の年金所得が保証される。一方、現役世代1人で2人の高齢者を支えるには、現役世代が1人で20負担しなければならない。少子高齢化で現役世代が少なくなったときには、この姿を思い浮かべなければならないだろう。

高齢化の進んだ地方社会では、現役世代の負担が大きくなると思いがちであるが、高齢化は不均等に進んでいく。不均等なものが併存し、かつ年金制度は全国単一で運営している。3人の現役世代と3人の年金世代がいるとする。現役世代2人・年金世代1人が都市圏、

現役世代1人・年金世代2人が地方圏だとすると、少ない人数でより多くの高齢世代を支える地方圏が大変に見える。ところが、年金制度は全国単一で運営されているため、現役世代の3人は等しく10ずつ負担して、3人の高齢者を支えるという構図が年金制度の実際の運用である。



さらに、高齢者がその地域の中だけで年金所得を使い、地域内で循環したとする。年金所得は何らかの形で現役世代に再移転されるため、高齢者が1人の都市圏では現役世代の2人に5ずつ還元されるが、高齢者が2人の地方圏では現役世代1人に20還元されることになる。もちろんこれは極端にデフォルメした姿のため数字通りにはならないが、比率感はお分かりいただけるだろう。つまり、高齢化の進んだ地域の若者世代は、都市部の若者世代より相対的には負担が少ないということである。今、なぜ若者が地方に興味を持っているのか。都市部の生活に飽きた、自然が良いという面は確かにあるが、実体論としてみると、地方の方が若者により優しいということである。新たな地域経済モデルを構築し、地域の中に還元していく仕組みを作れば、このような姿に近づいていくのではないだろうか。

仮に10の負担で20の給付が返ってきたとすれば、差し引きの10は外部経済からの移転所得であり、年金経済は「基盤産業」の1つになっていく。そこで問題は、給付20のうちどの程度までが、再び外部経済に流出してしまっているのかである。流出が10以上であれば地域の経済の衰退は加速し、10以下であれば



新規投資の原資にできる可能性が生まれてくるということである。

この「流入分岐点」を測定できる手法を確立すれば、地域に富を蓄積する道筋も開けてくるだろう。新城市の中で年金所得がどのように使われているか、地域経済にどのような役割を果たしているのかといったことを、愛知大学地域政策学部が研究委託してアンケート調査などを行っている。さらに個人のお年寄りの消費行動だけではなく、地域金融の活用にも着目していきたいと考えている。

## ●新たな「高齢者経済圏」の構築

新城市は高齢化率が高くなっていくとともに、どこかの時点で高齢者数そのものが減少していくことになる。絶対数が減少するということは、財布が小さくなるということだ。そこまでの期間の中で新しい循環を作っていくためには、勝負所を失ってしまうことになるため、その中で新たな「高齢者経済圏」を構築していく必要がある。高齢者の皆さんが消費をするだけではなく、地域経済に有効な投資行動や地域への貢献をしていただき、高齢者同士が支え合う仕組みをつくるとともに、高齢者雇用や起業システムを構築していくことを抜きにして、この超高齢化社会を乗り切ることができないのではないだろうか。

シルバー人材センターは高齢者福祉の観点からの事業だが、われわれは高齢者の所得機会創出事業にしていきたいと考えている。高齢者は、消費者、所得者、投資者、そして相続でお金を渡す世代であるといった面から、新しい関係を構築していきたい。これからの年金、社会保障制度をどのようにしていくのか。現役世代の負担を増やさざるを得ないのか。現役世代の負担増を必要としない「人生100年時代」を豊かに送れるようなモデルを作る、高齢化社会の一步先に入った「新出版・賢人会議」の挑戦である。

2060年には、生産年齢人口より老年人口と年少人口が増えると予測されている。さらに老年人口は増

えていくため、高齢者が被扶養者で終わるのか、それとも働く側、支える側に入るのかによって、社会の将来設計は変わっていくことになる。

消滅可能性都市のもう一つの苦境は、財政難である。「自主財源」だけでは財政運営が出来ないということ、は、市内の民間経済力(市税等)だけでは公共サービスの全てを賄えないため、他地域での民間経済力を国県税等の姿に変えて移入させ、その不足分の原資にしていることである。自主財源の確保は命題であるが、地域経済分析の規定に従えば、これもまた「外貨」である。

高齢化の進んだ社会では、公共部門はある意味稼いできている産業だと読み替えることができる。財政運営にこの視点を組み込み、行財政運営は自己完結型の閉ざされた体系ではなく、地域社会の中の資金循環や付加価値創造に貢献もし、逆行もする連結機能を持った体系だということを意識すべきである。こういった観点から、新城市では、「エネルギー公社」や地域の産品やサービスを地域全体で販売していくための「公共商社」の設立に向けて取り組んでいる。

地方創生戦略の基本視点は、人口移動のダイナミズムを恐れずその流れをつかみ、地域の特性と地政上の利点に立脚し、自らコントロール可能なことに政策資源を集中し、行政体も経済主体であることを忘れないことである。この四つの基本視点を行政職員と共有し、これからの地方創生に励んでいきたい。今後、「投資環境を整備する」「地域の産業開発を促進する」「エネルギーの外部流出を抑制し、域内還流を図る」「この3つをパッケージにして、市民の皆さんと一体となり「チームしんしろ」としてやり遂げていく」ということである。「支え合う力」×「稼ぎ出す力」＝まちの未来、これがわれわれの地方創生戦略である。

## ●これからの地域社会

新城市は、広域合併をして大きくなった。就業の形態が変わり、交通網の発達により移動はより容易になり、お互いに施設などを共有することで効率的な行政運営

をしようという話し合いの結果、新城市は500平方キロメートルという広大な地域を抱えるに至った。しかし、他人の力を必要とする人々の前には、効率性や交通の利便性は通用しない。生まれたばかりの子どもや介護を受けるお年寄り、福祉手当を必要とする病氣の方、障がいのある方たちと共に生き続けられる地域という単位がなければならない。だからこそ、この地域社会の中で、安全・安心が最大の課題となってきた。地域社会の持続可能性を担保するものは、住民自らが地域のことを考え、地域をつくっていく仕掛けづくりではないだろうか。

新城市は人口流出が続く高齢化が進んでいるが、一方で、新東名高速のような新しい環境が生まれてきている。グローバル化やIT化が進み、時間と空間の関係が大きく変わろうとしている中で、これからの地域社会を考えると、行政、民間、住民の皆さんが一つのチームとなり、総力を挙げて地域の持続可能性を追及していく必要がある、それを行うのがわれわれ自治体の仕事だと心得ていきたいと考えている。

これから全力をあげて地域経済の分析を行っているが、まだまだ分からないことがたくさんある。本日お集まりの皆さまは、経済界や金融機関、電力事業者などそれぞれの持ち分は違うが、地域社会が基盤を失ってしまえば成り立たなくなる産業であることは間違いないだろう。地域社会が持続していくために、世代のリレーができる、世代の更新をし続けられるまちづくりのために、虚心坦懐、腹藏なく議論ができる関係を作りたいだけだと考えている。

2030年代には、東京圏も含めて人口減少に入り、日本国民全体がジェットコースター真つ逆さまという時代になる。新城市では、超高齢化社会の中でなお持続可能な社会保障、現役世代の負担の在り方、そして高齢者自身が稼ぎ支え合う元気な社会を作り上げようと挑戦している。皆さまの暖かいご支援と、さまざまな知恵をお借りできれば幸いである。

「山里の豊かな資源」

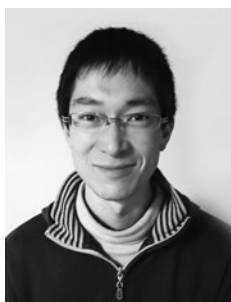
●はじめに

山の手油所  
代表 杉浦 篤氏

化学物質過敏症とは、さまざまな化学物質に対してアレルギーのように反応して体調悪化を起こすもので、医学的には未解明の病気である。症状には大きな個人差があるが、私の場合は、2012年頃に自覚症状が始めた。町ですれ違った人の匂いを、痛みに近いレベルで感じたのが最初である。その頃流行り始めた香りの強い洗濯洗剤や柔軟剤に反応したのだ。

それからほとんど症状が悪化。洗剤、柔軟剤、消臭剤、タバコ、排気ガスなどありとあらゆるものに反応し、全身の痛み、しびれ、思考力の低下や、重症時には歩くのも辛くなった。当時は、岡崎市にある基礎生物学研究所で植物の基礎研究をしていたが、町のどこにも居場所がなく、自分の家でさえ苦しくて痛みで眠ることもできない状態であった。化学物質過敏症には有効な治療法はなく、痛み止めなどの対処療法しかないのが現状である。

そこで、これまでの生活や仕事を一度全て諦め、足助の山間部に知人が所有する家で一年半ほど療養生活をした。町ではゴーグルやマスクなどいろいろと試してもうまくいかなかったのに、足助の山へ行くといきなり体が軽くなった。それまでは歩くのもしんどかったのに、歩くことができるようになった。化学物質過敏症には画期的な治療法はないが、空気のきれいな所に行くとは非常に体調が良く、自然の力を改めて体感したのである。



杉浦 篤氏

●地域おこし協力隊の活動

約一年半の療養後、以前と同じような社会生活は難しいものの、社会復帰の第一歩として設楽町の地域おこし協力隊に応募した。生物学、植物学など自然科学分野の研究経験を活かし、設楽町の自然を魅力的にPRするために、田峯地区を拠点に自然観察ガイドや出前授業などを行った。私独自の切り口として、化学物質過敏症の方たちに設楽町の環境の素晴らしさを実感してもらうために、「したらの自然でリフレッシュ」というイベントを開催。化学物質過敏症の方が集うイベントはおそらく全国的にもなかったため、全国各地から問い合わせがあった。また、参加者の中には、本格的に設楽町への移住を考え、しばらく設楽町に滞在していた方もいらった。

現在も化学物質過敏症の患者数は増加している。設楽町をはじめとした日本の山間部などは、そうした自然環境が生活に直結するものとして、その価値が見出されるのではないかと考えている。しかし、これを私が職業として発信していくためには、まずはこの設楽町で基盤をつくる必要がある。そこでいろいろと試行錯誤した結果、地域おこし協力隊の任期を終えた今年の4月1日から、設楽町田峯地区に「山の手油所」を設け茶油事業に取り組んでいる。

●茶油事業の背景

茶油は、お茶の種から搾る油である。ツバキ科のお茶は10月頃にツバキによく似た形の白い花が咲き、この花が1年後の11月頃に実となる。実の中の種は、地元では茶玉とよばれるごくありふれたものだ。戦争中には茶玉を集めて供出していたそう。おそらく機械油の材料になっていたのではないかとことだが、油自体はほとんどの人が見たことがない。私の着目点は、ツバキ科のお茶であれば、ツバキオイルと同じように上質のスキンケアオイルができるのではないかとということであった。

数年前から、エゴマ油やココナツオイルといった高付加価値の油が認知されるようになった。これまで油はあまり摂らない方が一般的に考えられていたが、良い油、適切な油を積極的に摂り入れるという考え方が広まってきている。また、食品だけではなく、化粧品においても、自然派や植物性、国産、地元産のものが人気となっている。その要因の一つと考えられるのは、乾燥肌やアレルギー、アトピー性皮膚炎などの患者が増えており、本当に肌にいいものを求める人が増えているからだと考えられる。

設楽町田峯地区は、標高が高く病気や虫も蔓延しないため、何十年も無農薬でのお茶作りが行われている地域で、田峯茶というブランドが確立されている。全国的にも管理できなくなり放棄された茶畑が問題となっているが、設楽町でも設楽ダム計画や過疎などで放棄された茶畑が増加し、そうした放棄茶畑では特に多くの茶玉が実り、未利用で放置されている状態である。それをお茶の油を作る現場として管理することで活かし、経済的な地域循環も生み出せるのではないかと考えた。

また、化学物質過敏症やアトピー性皮膚炎を持つ私であれば、患者目線で同じ病気で悩んでいる方が使えるような商品を開発し、発信していける。植物の基礎研究をしていた研究所時代の経験から、植物の知識や人脈を通じて科学的な裏付けもできるだろう。さらに地域おこし協力隊員として受け入れてくれた方たちへの恩返しの意味も込めて、設楽町田峯地区に山の手油所を設け、最初の商品として茶油を開発した。実際に現場の環境を見て欲しいという思いが強くあり、商品を売るだけではなく現地に來てもらえる仕組みを作っていきたいと考えている。

●「お茶の種」からスキンケアオイル誕生

田峯城址の駐車場の一角にある小屋を改装し、搾油所として整備した。導入した搾油機は、油圧で圧をかけて潰すだけという昔ながらの低温圧搾機であ



る。温度などで劣化させずに最もいい油が採れる。滴ってくる油は金色で、ゴミなどを少しろ過するだけで、色も抜かないし香りも付けない。可能な限り自然のままの良さを大切にしている。

採れる油は茶玉の重さの10%程度で、油の材料としては非常に少ない。ツバキでは茶玉の3倍程度の油が採れ、種自体の大きさも3〜4倍はある。食用ゴマは重量の半分程が油で、茶玉は油を搾る材料として量だけを考えると非常に効率が悪い。ところが、搾った茶油の脂肪酸組成を調べたところ、人の皮脂の主成分であるオレイン酸が非常に多いことが分かった。つまり、高い保湿性があり、肌にもともとある成分のため刺激も少なく、さらにオレイン酸自体とても酸化しにくい。例えば、エゴマ油は過熱や紫外線に非常に弱くすぐに劣化してしまうが、茶油は安定性が高いことが分かった。オレイン酸以外にも、肌に直接つけるのに適していると成分であることが分かった。

アトピー性皮膚炎の方に茶油を2週間使用していたとき、使用前後の皮膚常在菌の成分を調べると、使用前は悪玉菌が7割以上であったが、茶油使用後は善玉菌が多い理想的な状態に変化した。まだまだデータ数が足りないが、安定して茶油によって効果が引き出せるのであれば、国内でもほとんど例のない菌の状態から改善していく、肌を健康な状態へと導くような効果が期待できるのではないかと考えている。その他にも、安全性はもちろん、使用感についてもモニター調査などを行いながら開発を進めていった。

4月1日からスキンケアオイル「設楽茶油」の正式販売を開始。実店舗ではまだ2軒しか置いておらず、インターネット販売も始めたばかりであるが、いくつかがご購入いただき予約も入っている。肌の悩みのある方や化学物質が使えない方にも使っていたいただきたいというところで、完全国産（設楽町産）、無農薬、無添加で、加熱して劣化を進めることもせず、無脱色、無脱臭などにもこだわっている。自信をもって肌に使っていていいと表示するために、化粧品製造販売業の許可も取った。個人で

化粧品製造販売業の許可を得ることは非常に苦労したが、無事に取得することができ、雑貨や食用ではなく正式に化粧品として販売している。

## ●波及効果、展開

茶油だけでは多様な消費者の体質や肌トラブルに対応しきれないと考えられるし、日本の山里には茶玉以外にも多くの素晴らしい資源が眠っている。将来的には、年間通して様々な油を生産できるように、日本の山里の資源を活用した植物油の多品目展開を計画している。例えば「ユズ」や、「シロモジ」や「アブラチャン」といった植物などからも油を搾ることができる。世界でも前例のない高付加価値植物油として商品化できればと考えている。また、油搾り粕にも良い成分がたくさん残っているため、搾り粕を使った肥料や石鹸なども開発予定である。

商品販売だけではなく、茶玉を作るための専用の畑を作りたいと考えている。茶畑の管理は非常に重労働で人手も必要なため、高齢化によって管理できなくなってしまうことも多く、放棄茶畑は景観の悪化や獣害にもつながる。そういった所を管理の手間が少ない茶玉専用茶畑に改良し、茶玉の原料買い取りによって地域資源の循環ができるのではないかとすることで計画を進めている。通常、お茶の葉を生産するためには、肥料を大量に与え、年に何度も剪定をするが、その管理方法では花はほとんど咲かず、種も付かない。茶玉専用茶畑であれば施肥や剪定はほぼ必要ない。省力化しつつ、経済性を維持できる形を試行中である。

茶油に本格的に取り組んでいる事例は全国的にもまだ少なく、特に私のように外注ではなく現地でお金を稼いでいる例はほとんどない。昨年、県で開催していたモニターツアーでは、茶畑を散策し、田舎茶を飲みながら、実際に茶油を搾る様子を見ていただき、搾りたての油をお土産にした。参加された方にはとても喜んでいただいていた。小さな搾油所だからこそ見せることができるものがある。田舎のお茶畑があるからこそ、肌

に優しい茶油ができるのだということを伝える意味でも、茶油の観光化にも取り組んでいきたい。

日本の中山間地では放棄茶畑が増加しており、私と同じような発想で、実際に茶油をやっている人や、やりたいけれど出来ずにいる人が何人かいる。そういった他地域の人たちと連携し、茶油の協議会を立ち上げたいと考えている。つながることで茶油の知名度が上がったり、産業化が可能になったり、共通認識を持つことで品質の向上も図れるだろう。各地で抱える問題は違うが、共有できる部分もあるため、みんなで協力して日本の茶油を高めていきたい。

## ●まとめ

自然科学研究者としての経験や、疾病経験は私の強みである。自然科学研究に携わっていたからこそ化粧品業の許可を取ることができ、製品開発に関しても分析会社とタッグを組むことができる。また、私自身が化学物質過敏症やアトピー性皮膚炎を持っているからこそ、信念と共感を持って発信や商品開発ができると信じている。

そして、お茶業を営んできた設楽町田舎地区を拠点に地域おこし協力隊として活動したご縁のおかげで、茶油事業に取り組むことになった。周りの方たちからも応援していただけており、出掛けて帰ってくる家の中にバケツいっぱい茶玉が置いてあることもある。地域の方々への恩返しの意味も込めて、地域おこし活動の延長も含めて「山の搾油所」の事業を今後展開していく予定である。



# 「中東ってどんな場所?」 何が起っているのか?

中日新聞 豊橋総局

総局次長 中村 禎一郎氏

## ●日本から遠い場所

皆さんは、中東とはどんな場所かご存じだろうか。どの国がどうなっているのか、なぜ争っているのか、どんな民族がいるのか。実は、日本人は中東をよく知らない。日本人が知らないのであれば、エジプト人も日本を知らないのではないかと思ひ、エジプトに赴任してまず始めに、まちでエジプト人1000人に聞いてみた。

日本人が中東に行くと、指をさしてジャッキー・チェンと言われる。ジャッキー・チェンは、本当に日本人だと思っている人は多い。「日本といえど」と1000人に聞いた中で興味深いのは、6人が「日本人の細い目」と答えたことである。中東の人たちは、日本は原爆を落とされた後の荒廃の中から復興し、技術立国として世界一流の先進国に上り詰めた素晴らしい国だと思っているが、今でも原爆の影響で目が細いと思っっているようだ。

さらに興味深いのは、「日本人で思ひ浮かぶ人物」を尋ねると、安倍晋三首相と並んで鳩山由紀夫元首相の名前があがったことだ。米軍の普天間飛行場移設問題で「最低でも県外」と発言したことが、アメリカへの抵抗を示している」と称賛を受けたようだ。エジプトでの反米感情が、背景にはある。

次に、白地図を見せ



中村 禎一郎氏

て日本の位置を聞いてみると、なんと29人が日本を指さした。よく考えてみると、日本は小さい島国だということ。彼らはよく知っている。フィリピンやマレーシアを指さす人も少なくなく、日本は島国とだけ認識しているのだと分かった。

最も好きな国は、一位は母国エジプト、二位はサウジアラビアであった。サウジアラビアはイスラム教の聖地のメッカとメディナがあるため、日本のお伊勢さんのように、彼らにとって憧れの地である。複雑な思いが垣間見えるのは、好きな国の6番目に入っているアメリカが、嫌いな国の2番目であったことだ。アメリカに憧れてはいるが、愛憎半ばという心境が特にエジプト人にはあるのだろう。私の助手もアメリカのことは嫌いだ、アメリカ映画は大好きで毎日見ている。

## ●中東ってどんな場所?

中東で有名なのは、イスラム教徒の「ラマダン(断食月)」である。断食はとても大変だと思われるが、エジプト人にとってラマダンは、お祭りのようなものだ。中日新聞のカイロ支局にいる二人のエジプト人助手は、ラマダンの一週間程前からわくわくして仕事に手につかない。ラマダンの期間中は仕事も早く終わるため、家族みんなでドラマを見て、日没後にはいつもより豪華な食事をたくさん食べる。およそ一カ月のラマダンの期間が過ぎると、少しメタボになって帰ってくる。エジプトには娯楽が少ないため、ラマダンはとても喜ばれている。

エジプトはイスラム教の国なので、同性愛者にはとても厳しい。同性愛者がエジプトで捕まったりすると、「ビルの上から突き落とせ」くらいのことを平気で言ったりする。日本人とは、やはり感覚が違うのだと感ずるところである。

スーパーでの買い物では、「信州白味噌」という名の商品がなぜか赤みそだったり、「ワサビ味噌」のカップ麺

が売られていたり、日本はやはり遠い国なのだという印象である。日本でいうコーヒーが飲みたければ、「ネスカフェ」と注文しなければならぬので注意が必要だ。「コーヒ」を頼むと、トルココーヒーという全く違う物が出てくる。また、エジプトは小銭があまり流通していないため、小銭での支払いをしつこく要求される。こちらが持っていないと渋々出してくるが、彼らも小銭を持っていない時には「売らない」と言ってくる。だから私は寝室の棚の中にいつも小銭を集めていた。

中東というと、金銀財宝があつてお金持ちが多いイメージをお持ちだと思ひ、エジプトは石油が出ないため、実は資源の輸入国である。一人当たりの年間GDPは3千ドルで、日本の10分の1以下の非常に貧しい国である。一方で、湾岸の国々であるクウェート、カタール、UAEなどの国は、今でも石油で潤っている。

カタールは非常にお金持ちの国で、町中でカタール人を見かけない。働いているのは、フィリピン人やエジプト人などの出稼ぎ労働者がほとんどだ。夜中にレストランに入ると、やっとカタール人の姿を見かける程度である。私が駐在した当時は、人口約200万人のうち、カタール人はわずか30万人であった。

カタールはサウジアラビアの隣に位置するため、天然ガスをパイプラインで出すことができる。船で運ぶことになるが、その分輸送費が高くなる。そんな高い輸送費でも買ってくれる国はどこかというと、日本である。日本はカタールから多くの天然ガスを輸入しており、カタールの地下資源の輸出先の5割は日本である。イスラム教の信仰が厚いお金持ちが沢山住んでいて、彼らはイスラム過激派に資金を送っていると言われている。イスラム国やアルカイダが活動が続けられるのは、誰かが資金を提供して



いるからであり、カタールやサウジアラビアを含む湾岸諸国の富裕層だ。そう考えると、日本からカタールに行ったお金は一体どこに流れているのだろうと、少し複雑な気持ちになる。

## ●なぜ争うのだろう

中東では、一体何が起きているのだろうか。イスラム圏で起こっている争いは、大きく分けて二つある。一つは、イスラム教スンニ派(多数派)と、シーア派(少数派)の争いだ。イラク、シリア、イエメンなどの国は皆、内戦状態にある。イラク政権はシーア派、イスラム国はスンニ派である。基本的には、シーア派政権に対してスンニ派勢力が反発していて、さらにスンニ派勢力の中の過激な原理主義がISである。ISはもともと原理的にコーランを実行しろと主張し、同じスンニ派でも攻撃する。

スンニ派を支援している勢力がサウジアラビアで、さらにサウジアラビアを支援するのがアメリカやヨーロッパである。一方、シーア派を支援しているのがシーア派中心のイランで、そのイランを支援するのがロシアという構図である。国際ニュースを見ていると、この構図を前提に報道されている。例えば、シリアの内戦であるにも拘わらず、なぜロシアとアメリカが停戦に合意するのか、構図が分かっているなければ全く分からない。シリアやイラクなどの争いが簡単に収まらないのは、こういった構図が背景となっているからだ。

もう一つは、世俗派勢力とイスラム主義勢力の争いである。イスラム教にはイスラム法(シャリア)があり、厳格なイスラム教徒は、イスラム法による統治を求めている。例えば、戦争状態の時には捕虜にした異教徒は首を切れと書かれており、それを厳格に実行しているのがイスラム国だ。それに対して、イスラム的な色合いが薄い勢力を世俗派勢力と呼んでいる。リベラル派と表現するメディアもあるが、実体は軍である。そういう

た争いのある国が、エジプト、リビア、トルコなどである。トルコで2016年に起こったクーデターは、イスラム主義勢力の現政権に対して、反発する軍や警察などの世俗派勢力が画策したのではないかと言われている。

このような背景が分かってくると、争いやテロで狙われている場所や目的が違ってくる。エジプトでのテロは、イスラム主義勢力が世俗派を狙っていて、スンニ派とシーア派の争いがある地域でテロが起きたとなると、スンニ派がシーア派を狙って自爆テロを起こしたという構図になる。

2011年に「アラブの春」が起こり、それまでの独裁体制が崩壊または弱体化して、結果的に中東は混乱状態に陥った。アラブの春が起こった理由にはいろいろな見方があるが、私が実際に中東にいて感じたのは、貧富の差が激しかったり、権力を持った側が非常に高圧的であったり、不公平感が蔓延している現実だ。そういったことに対する反発が、アラブの春につながったのではないだろうか。

実際、家で雇っているお手伝いさんは、一カ月8千円で暮らしているのに、エジプト人の10分の1は、日本人の平均給与より多く貰っている。8千円で暮らしている人は、恐らくなぜ自分が8千円で暮らしているのか分かっていない。今、エジプトの社会がどうなっているのか分かっておらず、不満を感じただけの理解力がないのだろう。実際に不満を感じているのは、自分たちの国の現状を多少理解している人たちである。例えば、エジプト最高学府のカイロ大学に通う学生などは、エジプトの現状を説明すると、理解できる。イスラム国に加わる人は貧しいから参加している訳ではなく、貧富の差などの現状を理解して不満を持っている人たちだと感じる。世の中を変えたいのではないだろうか。

そもそも、なぜ争いがなくならないのだろうか。端的に言うと、中東は今でも部族社会のような社会で、分か

りやすく例えるならば、日本の戦国時代である。勝ったものが総取りする世界で、名誉殺人や男性優位が続いている社会である。また、他の家族や部族などの身内以外を身内に入れると、自分の家にあるものを盗られてしまうという感覚があるようで、従妹婚や近親婚が非常に多いのが現実である。

## ●中東での体験

私が、取材等で訪れた中東をご紹介します。シリアのコバニでは、有志国連合によるイスラム国への空爆の様子を撮影した。そこから1キロ程の場所でも撮影しているが、すぐそこで爆撃しているのに、こちら側ではスマホをいじりながら外国と連絡しているのが現代的であった。この地域の国境は厳格なものではなく、トルコとシリアの国境も超えようと思えばすぐに超えられる。イスラム国の戦闘員が怪我をすると、シリアからトルコ側に潜伏して治療などしている。イスラム国の戦闘員に話を聞くとときには、怪我をして出てきたISの中でも緩い感じの人に接触し、人の目のある喫茶店で必ず複数で会うなど、いろいろ工夫して取材をした。

ガザ地区の地上侵攻では、イスラエル軍がドローンで爆撃する様子取材した。初めて見たドローンが、イスラエル軍が爆撃するドローンであった。日本に帰って来たらドローンが話題となっていたため、時代も変わったと感じたものである。

イスラム国の取材が多かったため、シリアとトルコの国境やイラク北部へは何度も訪れた。内戦のためシリアの難民が多数出てきている様子や、イラクでは、性奴隷にされていたイスラム国から逃げたヤジド派の人たちなどを取材した。このように、中東で起こるさまざまなことを取材してきた。中東について、皆さんにどこまで伝えられたのかは分からないが、私の中東での体験をご紹介します。

新人会

【法人会員】

(株) サーラホテル&レストランズ

代表取締役社長 宮川直樹氏

〒440-0888

豊橋市駅前大通1-55 サーラタワー

TEL: 0532-51-1101 FAX: 0532-51-1102

会員関係者の動静

【顧問】

愛知県

企業庁長 松井圭介氏 (前: 間所陽一郎氏)

【法人会員】

(株) 大垣共立銀行 豊橋支店

支店長 中野恒明氏 (前: 満仲 淳氏)

総合埠頭(株)

代表取締役社長 廣演全洋氏 (前: 山口皓三氏)

中部電力(株)

豊橋営業所長 牧 真司氏 (前: 近藤 仁氏)

トピー工業(株) 豊橋製造所

執行役員 所長 中村 毅氏 (前: 加納愛仁氏)

西日本電信電話(株) 東海事業本部 ビジネス営業本部  
東三河営業支店

支店長 北村光春氏 (前: 鈴木由和氏)

日本通運(株) 豊橋支店

支店長 守田英司氏 (前: 倉地勝彦氏)

(株) みずほ銀行 豊橋支店

支店長 三瓶清之氏 (前: 井上史寛氏)

【特別会員】

豊川市

市議会議長 野本逸郎氏 (前: 山本和美氏)

市議会副議長 鈴木義章氏 (前: 野本逸郎氏)

蒲郡市

市議会議長 伴 捷文氏 (前: 大場康議氏)

市議会副議長 稲吉郭哲氏 (前: 大竹利信氏)

Clip

Board

伝言板

第184回 東三河午さん交流会

日 時: 平成30年8月3日(金) 11:30~13:00

場 所: 豊川市民プラザ

講 師: 豊川市 教育委員会 前田清彦氏

第406回 東三河産学官交流サロン

日 時: 平成30年8月22日(水) 18:00~20:30

場 所: ホテルアークリッシュ豊橋 5階「ザ・グレイス」

場 所: 豊橋技術科学大学 特任准教授 山内高弘氏

場 所: (株) 総合開発機構 代表取締役社長 小林宏之氏

第185回 東三河午さん交流会

日 時: 平成30年9月7日(金) 11:30~13:00

場 所: ホテルアークリッシュ豊橋 4階「テラスルーム」

第407回 東三河産学官交流サロン

日 時: 平成30年9月19日(水) 18:00~20:30

場 所: ホテルアークリッシュ豊橋 5階「ザ・グレイス」

sala

中部ガス不動産株式会社

不動産仲介

鑑定評価

アパート・マンション・ビル  
管理

不動産賃貸

不動産分譲

まちづくり・再開発

【お問い合わせ】

〒440-0881 豊橋市広小路3丁目91 本社 tel.0532-51-5800

<http://www.cgf.sala.jp/>

発行日 2018年7月20日

発行所 東三河懇話会

〒440-0888

豊橋市駅前大通3丁目53番地

太陽生命豊橋ビル2階

TEL.0532-55-5141 FAX.0532-56-0981

info@konwakai.jp

<http://www.konwakai.jp>

編集発行人 東三河懇話会 伊藤恵祐

定 価 300円